東方星戦録

レストレーション

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは遥か彼方の銀河系からやって来た尋問官と兵士とドロイド達の幻想郷での話である

この作品は東方ｐｒｏｊｅｃｔとスターウォーズのクロスオーバー小説です
正史、非正史作品の設定をどちらも採り入れています
それでも良い人はお読みください
ツイッターやっています

https://twitter.com/z0Abo2HE5wwjGPl?s=11

09

目次

一章の登場人物 ―― 1
幻想入り ―― 8
（リザレクション）での小戦闘 ―― 15
妖怪の山へ急行せよ！ ―― 20
スピーダーバイクチェイス ―― 23
失敗した説得と抵抗 ―― 27
説得力のある説得 ―― 31
人間の里と光の守護者 ―― 34
阿求の質問 ―― 39
ルーミアＶＳテラリア ―― 43
紅霧異変の発生 ―― 47
紅魔館への道のり ―― 51
紅魔館潜入 ―― 55
大図書室の戦闘 ―― 59
大図書室の戦闘パート２ ―― 64
大図書室の戦闘パート３ ―― 68
地下の戦闘 ―― 73
時止めのメイド ―― 78
紅魔館の決戦 ―― 82
合流 ―― 88
吸血鬼の姉妹 ―― 92
博麗神社の宴会 ―― 98
無縁　の遺物 ―― 103
弾幕 ―― 109
屑鉄 ―― 113

失われた船 119
仕掛けられた罠 125
忠誠 131
交渉 135
来訪者 138
夜の来訪者 142

一章の登場人物

名前　キーコ　テラリア
性別　男性
年齢　３５歳
種族　人間
出身　オルデラン
育ち　ジェダ
経歴　犯罪シンジゲート→銀河帝国尋問官→第９２１先鋭隊
概要　銀河帝国軍の尋問官であったテラリアは強大なフォースに恵まれ、皇帝から直接フォースを教わっていた
他にも、スローン大提督から、美術品を見て敵を分析する術を学んだ
しかし、尋問官の大半が反乱者達に殺され士官も大量に失ったため、本来の尋問官の目的から逸れた士官としての業務もこなしていた
ケッセル・ランを１４パーセクで抜ける程度のスターファイターの操縦技術がある
（しかし、全盛期のアナキン・スカイウォーカーには及ばないが）

コンピューターへのハッキングや再プログラムの技術は帝国一である
黒のコンバットスーツを着用し戦闘の際は前の見えないヘルメットを被った
ダブル＝ブレード回転式ライトセーバーを二刀流で使う事があるが最近は片方が故障したため、Ｘ―８ナイトスナイパーという型のブラスターピストルを使用している

名前　ＷＴ―１９５０（コトー）
性別　男性
年齢　５６歳
種族　クローン人間
出身　カミーノ
育ち　カミーノ
経歴　第２２４師団→第４４２包囲大隊→ＭＩ→第９２１先鋭隊
概要　銀河帝国軍のパージトルーパーコマンダー、元は共和国軍ＡＲＣトルーパー（途中で降格された）である。
腰にはいつもＤＣ―１７を二丁装備しており、それは帝国になっても変わらなかった。
クローントルーパー時代の番号はＣＴ―１８０３

製造過程で問題が発生し、年をとるのが人間より１．５倍遅くなっている
格闘技は得意で何度も部隊の危機を救った事もある
名前　シャープ
性別　男性
年齢　製造から４５年
種族　ドロイド
製造　バクトイドコンバットオートマタ社
経歴　分離主義者ドロイド軍→ＭＩ→第９２１先鋭隊
概要　元通商連合のドロイド、テラリアの右腕としていた
士官の仕事も増えたテラリアのために贈られた
元々が通商連合のドロイドだった為か５０１分隊等の一部のクローン兵から嫌われていた
Ｅ―１１を装備

主に登場するテクノロジー

（リザレクション）

テラリアに与えられた、レイダー級コルベットの名前、全長１５０メートルの輸送船
他に知られている機体として（コルウス）があげられる
コルウスと違うのは、ハイパードライブの等級が０．８である事の他に乗組員の大半がドロイドであることである
また、いつもエンジンルームにアストロメクドロイドが常駐している

（スペクタクル）
（リザレクション）に配備されているビトレイアル級アサルトトランスポート
装甲は量子クリスタル装甲
形はサクル社製のスタースピーダー１０００に酷似しているが
側面ドアがＬＡＡＴ／ｉのように大型のハッチになっている、元は灰色に塗られていたが、テラリアの荒っぽい操縦により塗装ハゲが目立つ
また、プロトン魚雷の発射管も搭載されている

ＴＩＥアドバンストｘ１
ＴＩＥファイターの一種、シールドとクラス４．５ハイパードライブを搭載
ダース・ベイダーの戦闘機と同じ機体

テラリアはこれに乗りケッセル・ランを１４パーセクで駆け抜けた

ＩＴ―０尋問ドロイド
別名拷問ドロイド、（リザレクション）の中には２台居る

ＩＤ―９シーカードロイド
偵察用のドロイド、改造により電気ショックの威力が強くなっている
また、地形から、美術品までを細かくスキャンできる高性能なスキャナーがついている

Ｒ２アストロメクドロイド
Ｒ３アストロメクドロイド
どちらもエンジンルームに常駐している

武器
改良型ＳＥ―１４ｃブラスター・ピストル
連射に優れたブラスター・ピストル

スタンモードの代わりに敵の目を眩ます機能の付いている
Ｅ―１１ブラスターライフル
銀河帝国軍の標準装備のブラスターライフル
Ｘ―８ナイトスナイパー
コンピューター式ヒートビジョンスコープを装着したブラスターピストル、スコープを覗けば敵の体温がスコープに出る
ＤＣ―１７ハンドブラスター
共和国軍のＡＲＣトルーパーに愛用されたハンドブラスター
現在でも製造されている
ＴＬ―５０ヘビーリピーター
銀河帝国特殊部隊用に製造されたブラスター
Ａ２８０―ＣＦＥ
狩猟用に製造されたブラスター、遠距離から中距離で威力を発揮する
Ｔ―７イオンディスラプターライフル
高威力のスナイパーライフルブラスター、過去にこのライフルによってラサットと呼ばれる種族が絶滅しかける事態になり、法律で使用が禁止されている
ダブルブレード回転式ライトセーバー

尋問官が使うライトセーバー、柄を囲むようにリングがついている、そのリングにそってセーバーが回転する

ライトセーバー

別名シングルブレードライトセーバー、ジェダイを捕らえた時に回収、前の所有者の名前はルミナーラ・アンドゥリ

ブラスターライトセーバー

テラリアが尋問官になりたての頃に使ったライトセーバー、組み立て方を間違えると通常のライトセーバーより激しい爆発が起こる為注意が必要

幻想入り

未知領域

一隻の輸送船が戦艦に追われていた
戦艦の砲台は絶えずレーザーを輸送船に浴びせていた
「コマンダー！後部シールドが残り３０％です！」
「わかってる！量子シールドは！」
「量子シールドは消失しています！」
「クソッ！何時になったら光速航行に移れる！」
「後二分デス」
「二分？何故そんなにかかる！天体観測している場合は無いぞ！」
「何シロ未知領域デスノデ…」
「何処でも良い！クレイトでもサヴァリーンでもいいから早くジャンプし…うわぁ！」
この時エンジンの近くにレーザーが当たり振動でハイパードライブが誤作動を起こし、船はハイパースペースに入った。

輸送船内
「この船はどこへ向かう？」
「コマンダー、コノ船ガ墜落シナイ確率ハ７２０分ノ１デス」
「そんな事はどうでもいい、コトーいつでも対応出来るように準備しろ」
「はいコマンダー」
「私ハドウスレバ？」
「エンジンの確認をしろ」
「了解」
彼らはとても冷静に行動していた
全員が準備を整えた頃船のアラームが鳴った
「そろそろリアルスペースに出るぞ！」
そう言うとテラリアはレバーを引いた
すると目の前に湖が現れた。このままでは湖に垂直に突っ込んでしまう事になる
「上昇しろ！」
テラリアは叫んだ
コトーとテラリアは機体を必死に起こしたが先には森があった

機体は森に突っ込み樹木を薙ぎ倒しながら進み２００メートル位進んだ所でやっと止まった
「スムーズナ着陸デシタネ」
「そうだな…シャープ」
「良し、まずは損傷箇所を確認しよう」
「はいコマンダー」

幻想郷／博麗神社
この神社の巫女である博麗霊夢は寝ていた
それもそのはず今は真夜中なのだから、しかし彼女はとてつもない爆音を聞き目覚めた。
眠い目を擦り外を見てみれば何と霧の湖の程近い森から煙が上がっていた
それだけではない煙が上がっている場所のすぐ近くに黒い物体が鎮座していた
「ちょっと何よあれ！」
「おーい霊夢ーー！」
すると白黒の服を着た魔法使いがやって来た
「何よ、魔理沙」

「あの落ちて来たあれ、何だろうな？」
「そんなの知らないわよ。少なくともあれはこちらに危害は加えないわよ」
　霊夢はそう言ったが黒い物体から緑色の光線が周りに向けて数発放たれ、そのうちの一発が博麗神社の近くに当たった
「前言撤回、行くわよ魔理沙！」
「そうこなくっちゃ」
　魔理沙は直ぐに向かって行ったが霊夢は着替える為に中に戻った

　輸送船周辺
「クソッ、なんだよコイツら」
　彼らは妖怪の襲撃を受けていた
「上空ノ敵ハダイタイ撃墜シマシタ」
「そいつは有難い報せだ」
「コマンダー！これ以上は無理です」
「…仕方ないコルベットに退避だ！」
　テラリアはそう言うとタラップをかけ上がった

「急いで閉めろ！」
　タラップは閉じ始めたが閉まる直前、箒に乗った少女が飛び込んできた
「潜入成功だぜ」
『動くな！』
「ヤバい、バレたぜ…」
『ボッチ語だと』
「英語か…？」
「いやボッチ語で良い」
「コイツ、日本語を喋った!?」
「コトー！そいつを捕らえろ。ショックモードにするんだ」
「はい、コマンダー」
　コトーはショックモードにしたE――1を構え立て続けに撃った
「そんなの甘いぜ」
「全弾回避しやがった！」
「こっちからいくぜ、魔空　アステロイドベルト」
「ぐわっ」
「コトー！」

「へへッ、次はどいつだ」
「この野郎！」
　テラリアはライトセーバーで斬りかかった
「おっと危ない」
「クソが！」
「黒魔　イベントホライズン」
「アブねぇ！」
　危うく当たる所であった。しかしテラリアは魔理沙に向けて全ての弾幕を弾き返した。
「何!?」
　魔理沙は弾き返した自分の弾幕に当たり気絶した
「コトー、大丈夫か」
「コマンダー…大丈夫です」
「それは良かった。」
「しかしコマンダー、さっきの生物と言いそこの少女と言い、何でしょうか、特にあの光る弾」
「わからないな、少なくともナイトシスターはあんな攻撃はしなかったな」

するといきなりハンガーの扉が吹き飛び残骸がコトーを直撃して気絶させた

「全く、この扉硬いわね」

そこには紅白の少女が立っていた

（リザレクション）での小戦闘

「全く、この扉硬いわね」
その声を聞いた途端、テラリアは腰のブラスターピストルを抜いた
テラリアのブラスターピストルはX―8ナイトスナイパーと言いヒートビジョンスコープを着けておりどんな悪天候でも
敵の姿を判別出来る優れものだ
スコープを覗くとそこには一人の人物がいた
テラリアはスコープを覗き相手の動きを見ていたが自分の体に大きな衝撃が走り飛ばされ床に叩きつけられるのを感じた
スコープに集中し過ぎて迫る弾幕に気が付かなかったのだ
テラリアは立ち上がりライトセーバーを起動した
「貴様は誰だ！」
テラリアは怒鳴った
「私は博麗霊夢、この幻想郷の巫女よ。貴方は誰！」
「銀河帝国軍尋問官、キーコ　テラリアだ。霊夢！先程侵入した白黒の服を着た少女は

貴様の仲間か！」
霊夢はテラリアが魔理沙の事を言っているのだとわかった
「えぇ、私の親友でもあるわ」
その言葉を聞いたテラリアは
「何で入って来た」と聞いた
霊夢は「じゃああの緑色の光は何」と聞き返した
「あれはターボレーザーと言う武器だ、我々の船が不時着した時に変な奴らがこの船に攻撃してきたから、判断を誤った付けを払わせただけだ」とテラリアは答えた
霊夢はテラリアの言っている意味がほとんど分からなかったが攻撃したからやり返したと言うことなんと無くだが分かった。
するとここで霊夢はあることに気付いた。奥に魔理沙が倒れていたのだ
霊夢は「魔理沙！」と叫ぶと魔理沙に駆け寄った
テラリアは「安心しろ気絶しているだけだ」と答えた
霊夢はその言葉に少し安心した。
すると霊夢は横に全身白い装甲服に身を包んだ人が倒れていた
「コイツ誰？」
「ＷＴ―１９５０、コトーだ、私の部下であり忠実な兵士だ」

二人は魔理沙とコトーが目覚めるまで
この地、幻想郷や弾幕ごっこについて会話していた

少女と尋問官待機中

「そう言うことだったのでしたか、コマンダー」
宇宙船レイダー級コルベット（リザレクション）にある格納庫には四人とロボット一体がいた
「改めて自己紹介するわよ私は博麗霊夢、この幻想郷の巫女よ」
「私は普通の魔法使い、霧雨　魔理沙だぜ」
「スーパータクティカルドロイドノシャープデス、ヨロシクオネガイシマス」
「元銀河共和国軍ＡＲＣトルーパー、銀河帝国軍、ストームコマンダーのＷＴ―１９５０だ、コトーと呼んでくれ」
「俺は銀河帝国軍尋問官のキーコ　テラリアだ」
お互いの自己紹介が済んだところで

急に六人目の声が響いた
「あら、面白そうね」
テラリア達は武器を構えたが霊夢は
「紫、聞いているんでしょ」
と言った
するとテラリアの目の前の空間が裂けて一人の少女が出てきた
その少女は八雲紫と名乗った
テラリアは紫から底知れない力を感じた。
恐らく、ダース・ヴェイダーにも勝る力の持ち主と、
「そんなに警戒しなくても良いわよ、ここに来たのは貴方方に聞きたいことがあるからよ」
「聞きたいことは何だ」
「貴方達はどうやって結界を越えたのですか?」
彼女が言うにはここ幻想郷は博麗大結界の中にあり外から入るには結界を越えなくては行けないらしい
その質問に対して答えたのはシャープであった
「オソラク、ソノ博麗大結界ハ、惑星シールドト同ジデ

光ノ速サ以下のモノは結界に阻マレルガ光ヨリ早イ物ハ通リ抜ケテシマウノカト」
それを聞いたコトーは「そうか！この船は光より1．２早いから結界を通り抜けたのか！」と言った。
紫はどうやら分かってくれた様だった（霊夢と魔理沙は思考が追い付いていない様子だったが）
その後、紫はテラリア達を幻想郷に迎え入れ、帰って行った（霊夢と魔理沙も一緒に）
テラリア達はハンガーに繋がる通路の扉を閉じてやっと寝た

妖怪の山へ急行せよ！

翌朝、朝食を済ませ、着替え、格納庫に行くと
背中から羽を生やした少女がＴＩＥアドバンストＸ１を見ていた
「お前は誰だ」
「文々。新聞の記者の射命丸　文です」
文はテラリアに「取材させてください」と言った
「色々機密情報もあるから答えられない事もある事を分かった上なら了承する」と、取材を受けた

～尋問官、取材中～

実に二時間にも及ぶ取材が終わった。
文はＴＩＥファイターや（リザレクション）や我々の事も聞いてきた
「あやや～それでは取材の内容は近い内新聞に載せますね」

と言って文は飛び立とうとしたがテラリアに止められた
「テラリアさん、何か用ですか?」
「お前はあの山から来たんだろ」
テラリアは妖怪の山を指差したが妖怪の山は一部ハゲていた
「何故ハゲている?」
すると文は「数日前に金属の物体が堕ちてきてあそこに墜落して爆発した」と言った
文はその物体が墜落する直前の写真を見せてくれた
その写真を見たテラリアは少々焦った顔になり「妖怪の山に案内しろ」と言った
「あそこは私達妖怪のテリトリー、テラリアさんのような見ず知らずの外来人が立ち入って良い場所ではありません」
テラリアは焦りを感じさせる口調で「私はあの船を知ってる、あの船は数年前にジナータ星系で行方不明になった帝国の船だ!」と言ったが文は聞く耳を持たない
すると「コマンダー、何をしているんですか」とコトーがやって来た
テラリアはコトーに写真を見せた、するとコトーが
「(ディストラクティブ)!?、不味いな…早くコマンダーを墜落地点に案内して下さい!」
文は「何を言おうが案内はしませんよ、絶対に来ないで下さいね」と言い妖怪の山に帰って行った

「コマンダー、どうしますか？」
「スピーダーバイクに乗って突入するしかないだろ」
テラリアは格納庫にある７４―Ｚスピーダーバイクに股がりコトーはＡ２８０―ＣＦＥを背負いテラリアの後ろに股がり飛び出して行った
森を抜け、ショートカットするために湖の真ん中を突っ切り妖怪の山へ向かった

妖怪の山登山道近くでは鴉天狗が待ち伏せていた。
文の報告を聞いた大天狗はテラリアを警戒したためテラリアを迎え撃つ命令を下したのだ
すると向こうから「ブゥーン」と低い音が聞こえた
その直後スピーダーバイクに乗ったテラリアとコトーが通り過ぎて行った鴉天狗達はスピーダーバイクを追跡して行った
コトーは後ろを振り向くと鴉天狗達が追跡しているのが見えた
「コマンダー！つけられています」
「思ったより早いな…」

スピーダーバイクチェイス

山の近くに爆走する一台のスピーダーバイクとそれを追う鴉天狗四人がいた
「コマンダー、すぐに追い付かれますよ!」
確かに鴉天狗はスピーダーバイクを上回る速度で追跡している。
「よし、捕まれ!」テラリアはそういうとスピーダーバイクを急に減速させた。
鴉天狗はスピーダーバイクを追い抜いてしまう、更に一人はその先の大木にぶつかり気を失った
「残り三人です。コマンダー」
「ブラスターをショックモードにして発砲しろ」
「了解、コマンダー」
コトーは後ろにスタンビームを打ち続けた
鴉天狗は次々に避け続けたが、前から二番目の鴉天狗が一発避けきれず被弾、後ろの鴉天狗を巻き込み墜落した
残った鴉天狗はしつこく追いかけてきていた
コトーがバランスを崩してスピーダーバイクから落ちても鴉天狗はコトーには目も

くれずテラリアを追いかけた
するとテラリアは一つの作戦を思い付いた
テラリアはスピーダーバイクを急に反転させて山を降りる体制になった
当然鴉天狗も追いかけた、しかしテラリアはある程度走ったところでスピーダーバイクから飛び降りた
鴉天狗はそれに気付かず無人のスピーダーバイクを追いかけて行った
「危なかった。」テラリアは特に傷は無さそうだった。
そしてコトーが落ちた方へ移動した

尋問官移動中

コトーは樹の根元で倒れていた
「コトー、大丈夫か?」
「あぁ…大丈夫ですコマンダー、無事です。」
どうやら気絶していた以外は大丈夫そうだ
「しかしコマンダー、墜落現場までどうやって行きます?」
コトーは不安そうに聞いた、しかしテラリアはそれに対して、「フォースの導くままに

行くしかない」と答えた
二人はテラリアのフォースを便りに墜落現場に向かった

尋問官と兵士移動中

墜落現場の端についた、見渡すと金属片などが転がっている。
「うーむ、着いたは良いがどうやって警告するかだな…」
二人はどうしようか考えていた。すると
「動くな!」
気がつくと二人は囲まれていた、うかつだった。立ち話をしていたら嫌でも気付く筈だ、その上武器も盗られていた
「こいつらどうします?」
「侵入者は大天狗様の所に連れていくよう命令を受けている」
「じゃあ大天狗様は何処に?」
「残骸撤去の指揮をとっておられる」
「じゃあ連れていけ」
そんな天狗達の会話を聞きながらテラリアはどうか船の中身に触れていない事を

願っていた

ところ変わって残骸の撤去現場

一人の天狗が全長1メートル位の黒い円筒に似た形の物体をコンテナの中から見つけていた

失敗した説得と抵抗

テラリア達は大天狗のもとへ連れてこられた
抵抗しようと思えば出来たが自分達は戦争をしに来たのではない為、黙って従っていた
すると目の前に黒服を着た鴉天狗四人に守られた天狗が出てきた。
恐らく彼が大天狗だ
黒服を着た四人に守られた姿はデス　トルーパーに守られたクレニック長官を思い越させた。
大天狗は「貴様らか、我々の領地を犯したのは。」と言った
テラリアは「はい、私達です。」と言い続けて話そうとしたが、大天狗は話を遮り、「何故、入って来た」と言った。
「あの墜落した物体には危険な物が大量に積まれている、危険だから警告をしに来た」
「そのくらい、言われんでもわかるわい！」
その時数人の白狼天狗が黒い円筒型の物を運んで来た、
「大天狗様、これらをどうすれば良いでしょうか？他にも数百はあるのですが…」

大天狗はそれを見ると「何だそれは」と言った
するとその円筒型の物を見たコトーは「げぇ！プロトン爆弾！」と叫んだ、続けてテラリアも「それだ、危険物！」と叫んだ
大天狗は内心驚いたが冷静を装い「こんな物が我々の脅威にはならぬわ！」と言いテラリアとコトーを一時的に閉じ込めるように命令した
「話を聞いてくれ！」「この山がさらにハゲ山になるぞ！」と二人は言ったが無視して行ってしまった
（クソッ、少々手荒で野蛮だがやるしかない）
テラリアはそう確信するとフォースでライトセーバーを引き寄せ起動した
そしてまずコトーの縄を切りセーバーをコトーに放り投げた
コトーをそれを受け取りテラリアの縄を切りセーバーを返した
天狗はそれに気付くと弾幕を放ち始めた
テラリアは盗られたブラスターライフルを引き寄せたあとライトセーバーを回転させた
「コトー！こいつらを倒したら、サイズミックチャージを探すぞ、私がフォースで高く放り投げるから適当なタイミングで撃て！」
「はい、コマンダー」

弾幕はライトセーバーに阻まれテラリアには当たらなかったがここで思いもよらない事態が発生する
なんと急にライトセーバーの回転が止まり赤色の光刃が消えたのだ、バッテリー切れである
「うわっ」
二人は間一髪でかわした
「移動しながら撃て!」
二人はブラスターをショックモードにして撃ち始めた

～二十分後～

二人は明らかに押されていた
何回も弾幕がかすった
「コマンダー、これ以上は無理です」
二人は死を覚悟したその時、
「何をしておる?」
と声が聞こえた

そこには天狗らしき者がいた、テラリアは彼から紫とほぼ変わらない力を感じた
するとテラリア達に弾幕を撃っていた天狗が「天魔様！大天狗様にこの二人を連れていくように頼まれたのですが抵抗したので大人しくさせようとしたところです。」と言うと
天魔は「儂はその二人に用がある」と答えた
天狗は少々躊躇ったが去って行った
「さてと、お主らは落ちてきた物に心当たりがあるのだな、どうか教えてくれんかの？」
「はい、実はあの物体は…

～尋問官説明中～

…と大変危険な物なのです」
天魔は「うむ、つまり大変危険な物から山を守ろうとしたのじゃな？」と聞いた
「はい、このままではこの山の一部が抉れる可能性もあります」とテラリアは答えた
天魔は「儂についてこい」と言い墜落現場へ向かった。テラリア達はそれについていった

説得力のある説得

二人は天魔に連れられ墜落現場へ戻って来た
大天狗は二人を見て驚いていたがその前を歩く天魔の姿を見て更に驚いていた
「天魔様！何故罪人と歩いて居られるのですか！」と大天狗が聞いた
「この者達に用があっての、妖怪の山の危機を救おうとしておるのじゃ、二人はの」
しかし「そいつの戯言を信用するのですか!?」と譲らない
「誰が戯言だと決めつけたのじゃ？」
するとあちらこちらから声が聞こえて来た
「そんな見ず知らずの奴の言葉なんて信用できるか！」
「しかも文の話によれば脱走兵だぞ！」
「山を吹き飛ばす爆弾なんて存在するのか？」
「爆弾だと嘘をついて我々を追い出す罠かも知れんぞ！」
どうやら信用する気は無いようだった。
すると天魔は「うむ、事実は誰か確認したのか？」と聞いた
すると今まで散々喚いていた天狗達はしんと静まり返った

天魔はその反応を待っていたかのように「そのようじゃな」と言った、そしてテラリア達に危険性を説明してくれと言ってきた
テラリアはコトーに「いいか、コンテナをフォースで高く放り投げるからお前はスナイパーでコンテナを撃て」と言った
テラリアは転がっている扉の開いた貨物コンテナに手を向けた
するとコンテナは浮き上がった
ここで二人は目配せをして頷くとテラリアはコンテナを高く放り投げた
コトーはそのコンテナの開いた扉にブラスターを発射した
するとコンテナから青白い光が見え一瞬全ての音が聞こえなくなった
その次の瞬間「ツディィィィィィィィィィィン!!」
と恐ろしく大きな音が響いた
周りを見てみると、音の大きさのあまりに腰を抜かしている者、呆然と立ち尽くす者、近くのコンテナから遠ざかる者がいた
天魔は「どうじゃ、これでもこの者達の話が信用できないのかの?」と聞いた
「これは、予想外すぎる」
「だから警告をしに来たのです」
その後、爆弾などの入ったコンテナなどは全てテラリアが管理する事になりコンテナ

をまるごと運ぶため墜落現場に修理の終わった【リザレクション】が乗り入れたり、爆発音を聞き異変と勘違いした霊夢と魔理沙がやって来たり、初めて見る宇宙船に興奮した河童がやって来たり（名前は
　河城にとり）した
　またこの一件によりテラリア達に妖怪の山の玄武の沢付近までの立ち入りが許可された

【リザレクション】艦内
「ソンナ事ガアッタノデスカ」
　二人はシャープにこれまでの出来事を話していた
「明日ハドウシマスカ？」
　テラリアは「明日は全員で人間の里に行ってみようと思う
　そこからジェダイ特有のフォースを感じるからな」
　と言った

人間の里と光の守護者

翌朝、朝食を済ませたテラリア達は人間の里へ行く為の準備を始めたのだが
「コトー、我々は侵略するつもりでは無いぞ」
「分かっていますコマンダー」
「じゃあ何故、ＴＬ－５０へビーリピーターを持っている」
「最低限の武装です」
「最低限の武装はブラスターピストルだけで良い！」
「ですが、また変な奴らからの襲撃の恐れが…」
「ブラスターピストルだけで良い、反乱を起こすつもりか」
「…はいコマンダー」
このようなやり取りを朝から５回程続けていた
そしてやっと準備が整い
「全員、人間の里へ行くぞ」
「はいコマンダー」
「了解」

やっと出発できた

～尋問官移動中～

「ここが人間の里ですか？」
「そのようだ」
彼らは人間の里まで来た、見渡す限り活気に満ち溢れていた、ただやはりドロイドやスピーダーはなかった
だが
「コマンダー、我々目立っていますよ…」
「!?」
確かにそうだった
全身真っ黒のコンバットスーツを着て黒いヘルメットを被った男と真っ白のプラストイド合金のアーマーを来た男おまけに2メートルはある3つ目のドロイドが固まって歩いていれば嫌でも目立つ

道行く人々がこちらに奇妙な目を向けていた
するとローブを着た人物が急に目の前に飛び出してきて
斬りかかってきた
テラリアは背中からライトセーバーを取り出すと起動し迎え撃った、火花が散り、周りの人達は逃げていく
よくみると相手は緑のライトセーバーで斬りかかって来ていた
相手はジェダイだった
するとジェダイが口を開いた
「お前は帝国の尋問官だな」
「ただし元な」
ここでテラリアは距離をとった
「嘘をつけ」
「嘘ではない、武器を仕舞ってくれ」
「お前が仕舞ったらな」
テラリアはジェダイの言う通りに従いセーバーを仕舞ってジェダイに向けて放り投げ、ブラスターを構えていたコトーに仕舞うように指示した
「何のつもりか?」ジェダイはそういった

テラリアは自分が帝国から離反した経緯について話した
「…まさかオルデランを…そんな」
「故郷を使えていた国に破壊されれば、嫌でも失望するさ
マスタージェダイ」
「私はマスターフリートだ」
「そうか、私はテラリアだ」
すると
「お前達、何をしている！」
と声が聞こえた
見てみると腰まで伸びた長い青のメッシュの入った銀髪の女性が立っていた
「あぁマズイ、慧音だ」
「けーね？それがあいつの名前か？」
「あぁ、そうだよ」
「何が不味いんだ？」
「直ぐに分かる」
すると慧音はテラリアに正座するように言いテラリアはそれに従った
そして慧音は大きく頭を振りかぶった

テラリアは自分の頭に強い衝撃が走ったのを感じ、意識を失った

阿求の質問

「…ンダー……コマンダー…」
誰かが私を呼んでいる
気が付くとテラリアは何やら見覚えのある場所に立っていた
あぁ、そうだ私はデス・スターの配属になったのだ
確か、衛星ジェダに移動した筈だ
ちょうどデス・スターで影になっている辺りが私の育ったジェダ・シティだ
私は思い出に浸っていたが突然、何かが動くような音が聞こえ、窓の外に緑の光が見えた。
光は光線となり、ジェダシティに直撃して、巨大な爆発を起こした
テラリアは自分が落下するような感覚に襲われ、それと同時に何千と言う者の恐怖による叫びと死を感じた
「コマンダー…しっかりしてください…コマンダー…」
「コマンダー!」
「うわっ!」

テラリアは跳ね起きた、夢を見ていたのだ
「なんだ…コトーか」
どうやらコトーが船に運んで来てくれたようだった
「コマンダー、うなされていましたが…」
「コトー、それ以上は言わないでくれ…思い出したくない」
すると、テラリアはここで見覚えの無い建物の中に居る事に気付きコトーにこの場所は何処かと訪ねようとした
「お取り込み中失礼します」
しかし、誰かが来たようだった
ここで拒否しては失礼だろうと思い、「どうぞ」と言うと
二人の女が入って来た
一人は背丈が低く紫色の髪のおかっぱで花の髪飾りをしていた、もう一人は、慧音だった
部屋に入るなり慧音は、テラリアに「申し訳ない！」と言い土下座をし始めた、
テラリアは「いえいえ、見ず知らずの辺境惑星の集落で突然、戦闘を始めて怒られない方が不思議ですって、全てこちらに非がありましたから」といって慧音に頭をあげるよう促した。すると、

「あの…私、質問良いですか?」と声がした。
　テラリアは「別に良いが、名前を聞いても良いか?」と返した
「はい、私は稗田　阿求です。阿求と呼んでください。貴方
　方の名前も聞いてもよろしいでしょうか?」
「勿論だ、私はキーコ　テラリア、元銀河帝国軍尋問官だ」
「私はＷＴ―１９５０だ、コトーと呼んでくれ」
「スーパータクティカルドロイドノシャープデス」
　自己紹介が終わると阿求はテラリアに聞いた
「貴方方は、外の世界から来ましたよね」
「あぁ、そうだが何か?」
「実はですね最近、外の世界から来る人の中に能力を持っている人が多いんですよ。だから貴方方も何かしらの能力を持っていれば教えて欲しいのです」
「能力か…シャープはドロイドだから人間じゃないし、コトーはクローン兵だから、これと言って特別な物は無いし、私はフォースを操るだけだからな～」
「貴方もフリートさんと同じくフォースを操るのですか?」
「まあな、但し暗黒面のフォースだがな」
　それから阿求はテラリア達に様々な質問をして、終わる頃には、日もとっぷり暮れて

いた

「あー、疲れた」

彼らは帰路についていた。

阿求は自分の家に泊めようとしたが断り夜中の森の中を歩いていた

すると、彼らを狙う者がいた

その者はテラリアの前に飛び出すとこう言った

「ねぇ、貴方は食べても良い人類？」

ルーミアＶＳテラリア

「貴方は食べても良い人類？」
　その言葉が聞こえた途端、コトーは身構えた。
　銀河系では人を食う種族は珍しくはないのだが発せられる気配から判断した
　彼女は危険だと
　しかしテラリアは自分と同じような闇の力を彼女から感じていた。
「コマンダー、離れて下さい！こいつは危険です！」
「まぁ待て、俺が対処するから下がってくれ」
「いいえ、彼女は普通とは違います！」
「ラスターやガンダークを討伐するわけじゃないんだから下がれ！」
　コトーは渋々下がった
「さて、まずはお前の名前が知りたい」
「ルーミアよ、貴方の名前も知りたいわね」
「テラリアだ、聞き間違いでなければお前は私を食べるつもりかな？」
「そうよ、あなたを食べるの」

「なら少々、痛い目に遭う事は覚悟の上とみた！」
と言うとテラリアはライトセーバーを起動させ構え
「かかってこい」と言った
「おもしろい人間ね、いくわよ」
ルーミアは一直線に赤い弾幕を出してきた
「甘い！」
しかしテラリアはそれらを全てルーミアに弾き返し
ルーミアは自分の弾を避ける羽目になった
「ふーん、やるわね」
「ブラスターの弾より遅いから簡単だ、嘗めて貰っちゃ困る」
「なら、これはどう？」
すると、周りが急に真っ暗になり何も見えなくなった
そう、ルーミアは闇を操る程度の能力をもっているため、
テラリアの周りに闇を出して視界を無くしたのだ
「どーよ、闇の中で弾幕がどこから来るのかが判らずに死ぬ感覚は」
「視覚を阻害したのか…アイデアは悪く無いが、相手を誤ったようだな！」
ルーミアはその声が聞こえた瞬間に体が吹き飛ばされる感じがした

闇を解除すると、テラリアが明らかに視界ゼロのヘルメットをかぶり、手をこちらに向けているのが見えた
「さぁ、判断を誤ったつけを払え」
テラリアはそう言うと指先から電撃を出した
電撃はルーミアに直撃し、吹き飛ばされ、木に叩き付けられた
「まだやるか？」
「…降参です」
「良し、怪我はないか？」
「無いけど、どうして闇の中でも私の場所がわかったの？」
「フォースでお前の場所を探ったからな、それに俺は視覚ゼロで戦うのには慣れている。」
「そーなのかー」
すると、ルーミアの腹部からギュルルルルと音が聞こえた
「あー…コトー、戦地非常食のパン作れるか？」
「はい、こちらに」
コトーは小さな密封された袋に入った少量の粉と水を出し
袋に水を入れた、すると粉が膨らみパンになった

「ルーミアサン、タベマスカ?」

シャープは、コトーから受け取ったパンをルーミアに差し出すとシャープの手からパンをひったくり、凄い勢いで食べ始めた

どうやら、かなりの空腹のようで、襲ったのはたまたま通り掛かったテラリア達に目をつけたようだった

「あー美味しかった、ごちそうさま」

と言うとルーミアは飛んで何処かに行ってしまった

「うーむ、アイツから闇のフォースを感じたのは気のせいか…」

「どうしました、コマンダー?」

「あー…なんでもない、早く帰るぞ」

紅霧異変の発生

幻想郷に来てから数日が経過した頃

（ヴァーンヴァーン）
「ん…何だ」
（ヴァーンヴァーン）
「…って、警報?!」
テラリアは跳ね起きるとブリッジに走って行った

～尋問官移動中～

「おい、何が起きた！」
「コマンダー、空ヲ見テ下サイ」
「おいおい、空が一面真っ赤じゃないか、何だこの天気は」
「ソレニ、大気ガ急変シテイマス」
「だから警報が鳴ったのか」
「コノ大気ハ人体ニ悪影響ヲ与エマス、マルデ惑星ミンバン　デス」

「なるほど、ならスワンプトルーパーの装甲服着る羽目になるな、肺の洗浄だけはされたくないからな」
　すると、コトーがブリッジに入って来た
「コマンダー、さっきの警報は…」
「大気急変警報だ、お互いスワンプトルーパーの装甲服を着用しなければならない」
「だが他の奴らはどうだ、この地の技術じゃあ呼吸マスクは作れんぞ」
「そいつは不味いな…フリートに連絡はしたか！」
「『こっちは間に合っているから原因を探してくれ！』トノコトデス」
「そうと決まれば博麗神社に急行しよう、武器を持って行く準備しろ！」
「「ラジャーコマンダー！」」
　全員は武器をとりにブリッジから出ていった

～出撃準備中～

（ブウォーンブウォーン）
　二台のスピーダーバイクが博麗神社に向けて疾走していた
「前方に注意しろよ！ぶつかったら最悪死ぬぞ！」

「わかっていますコマンダー!」
　すると頭の上を霊夢と魔理沙が通過していくのが見えた
「コマンダー、霊夢と魔理沙が上を通過しましたが…」
「何っ!全速反転しろ!」
　二台のスピーダーバイクは反転し、霊夢達を追いかけて行った
「霊夢、何かつけられているぜ」
　魔理沙はそう言った。
　霊夢はその声を聞くと速度を落として後ろを見た
　確かに後ろから追って来ているがそいつは随分と見知った顔だった
「あー…テラリア達よ」
「はぁ!?何でアイツらが来るんだ?」
「とりあえず魔理沙、着地するわよ」
「…わかったぜ」
　速度を落として着地をすると、テラリア達も止まってくれた
「あんた達は何をしているの?」

「ちょいと元凶を潰しに行くだけ」
「あのなぁ、異変を解決するのは遊びじゃないんだぞ」
「ですが魔理沙殿、弾幕決闘は遊びでしょう、それに、ブラスター弾よりは遅いから楽勝です」
「ソノウエ、フリートカラ異変ノ元凶ヲナントカスルヨウニタノマレテモイマス」
その言葉に霊夢は少し考えた後
「わかったわ、ついてきて良いわよ、ただし危なくなったら逃げなさい。」
「ありがとう、良し行くぞ!」
こうしてテラリア達も異変を解決しに同行した

紅魔館への道のり

霧の湖

そこに二人の妖精がいた

「遅いよ大ちゃーん！」

「チルノちゃんが速すぎるだけだって～」

「へへん、あたいは最強だからね」

「それよりこんな悪い天気なのに何をするの？」

「あの赤い大きな家に行くの、多分この天気の原因だと思う！」

「えー、それ本当に？」

「何か分からないけど感じるの、あそこからね」

「そんなの当てにならないよ～」

「大丈夫、あたいは最強だから」

そんな話をしていると大妖精の後ろから何かが高速で突っ込んできた

「大ちゃん危ない！」

「えっ!?」

大妖精は咄嗟に身構えたが何も起こらなかった
後ろを振り返ると変な物に跨がった全身真っ黒の服の人間がすぐ後ろで停まっていた
「おーい大丈夫か?」
そう声をかけられたが意識が遠退いていった

テラリアは猛スピードで霧の湖に向かっていた
「霊夢、霧の湖の方面であっているんだよな?」
「勿論よ、湖の畔にある館に向かうから合っているわよ」
「そいつは良かったが…この大気は人間には有害だけど大丈夫か?」
「魔法の森の瘴気に比べたら楽勝だぜ!」
「…魔法の森に行くときはフィルターの状態に注意しないといけないな」
「私ハ大丈夫デスネ、真空デモ活動デキルカラ」
そんな会話をしていると森を抜けた
しかし目の前には羽根を生やした二人の少女が見えた
「おぉっと!」
テラリアは急ブレーキを掛け、少女の真後ろで停止した

「おーい大丈夫か？」
　テラリアはそう声をかけた
　すると目の前の緑服の少女は後ろに倒れた
「おい！」
「恐らく気絶したのかと思います」
　すると青い服の少女が「よくも大ちゃんをやったな！」
　と弾幕を出して襲ってきた
「マズイ！退避！」
　二人はスピーダーを急発進させ、逃げた
「逃がさないよ」
　テラリアを追いかけようとしたが、
　恋符「マスタースパーク」
　その声が聞こえた途端、彼女は後ろから来たレーザーを食らい墜落した
「あれは、なんだったのでしょうかコマンダー？」
「正直、分からん」
「おーい、テラリアー！」
「どうした、魔理沙？」

「いや、お前らが先に進み過ぎるから…」
「あぁ、そいつはすまない」
　すると目の前に赤い館が見えて来た
「目の前の目に悪そうに真っ赤な館がそうか?」
　すると霊夢とシャープが追い付いてきた
「ええ、その通りよ」
「コマンダー、霊夢カラ話ヲ聞キマシタガ、アノ館、紅魔館ニハ、ラスター並ミノ強イ妖怪ガイルヨウデス」
　それを聞いたテラリアは
「そんなに強いのなら、興味あるな、勿論行くぞ!」
　と言った
　全員は、紅魔館に向かって行った

紅魔館潜入

テラリア達は紅魔館に到着した
塀どころか、館全体も目に痛い赤色である
しかしテラリアはそれよりも気になる事があった
「あいつって門番だよな」
「見た限りではそうだな」
「やる気あんのか、あいつ」
門番とみられる赤髪の女性が壁に寄りかかり、爆睡していたのだ
「完全ニ寝テイマス、起キマセンネ」
「テラリア油断しちゃだめよ、あいつは紅　美鈴、妖怪よ
横を通り抜けた途端に攻撃される可能性があるわ」
「なら、眠っていてもらえばいい」
そう言うとテラリアはホルスターからブラスターを引き抜き、青白い光線を三発当てた
美鈴はそのまま横に倒れた

「何をしたの」
「スタンビームを食らわせて気絶させた、眠っているのが悪い」
と言ってテラリアは門に掛かっている錠前に今度は赤い光線を当てて錠前を破壊して中に入って行った
もちろん、コトーやシャープも入って行った
「あいつって私が言うのも難だけど、無慈悲よね」
「それだけじゃない、錠前の破壊の手際良さ私にはわかる、あれは慣れているぜ」
「尋問官って一体何者なのかしら?」
「考えても仕方ないぜ、ほら先に行くぜ」
「ちょっと、待ちなさい!」
二人も中に入って行った
「うーむ、どうしようか」
「テラリア、どうかした?」
「上と下に別れている、どちらからも危険を感じる。」
「それなら別れて進めば良いんじゃないか?」
「…良し、じゃあ上には誰が行く?」
「私が行く」

「了解、じゃあコトーも付いていけ」
「了解、コマンダー」
「はぁ!?ちょっと私は許可していないんだけど…」
「さて下には俺と魔理沙とシャープで大丈夫だな」
「話を聞け！」
「ほら行くぞ！」
「おーい！」
　テラリア達は行ってしまった
　霊夢は「あんたの指揮官は何を考えているの？」とコトーに聞いた
「さぁ、ジェダイの指揮下にあった時もそうだったが、どうもフォースを使う奴の考えはわからない」
「魔理沙、あいつと行って大丈夫かな？」
「まぁ、気にするのは後にしないと、まずは上層を調べよう」
「そうだった、忘れていたわ！」
　二人は階段を上って行った

　一方、霊夢と別れて階段を下ったテラリア達は大量の妖精メイドと鉢合わせしてしま

い交戦していた
「おー、こいつは楽しいな」
ブラスターを撃ちながらテラリアはそう言った
「そうだろ、そのうち病み付きになるぜ」
魔理沙も星型弾幕を出しながら言った
「コマンダー、右カラ増援」
シャープはブラスターを撃ちながら索敵をしていた
「魔理沙！新手が来るみたいだぞ！」
「わかったぜ！」
二人は新たな敵に掛かって行った

大図書室の戦闘

紅魔館　地下大図書室

大量に押し寄せてきた妖精メイドの大群を蹴散らしたテラリア達は、フォースの導きに従って館の中を進み、ここまで来た

「わぁ、本がいっぱいだぁ」

「確かにたくさんあるな、インペリアルパレスを思い出すな」

「私ガ見エテイル範囲デモ、１０５０３冊はありますね」

全員が図書室の蔵書量に驚いていると

前から弾幕が飛んできた

「全員散開！」

テラリアはそうさけんだ

魔理沙とシャープは直ぐに本棚の後ろに隠れた

「逃がしませんよ！」

と、声がした

するとテラリアの前に急降下してきた

「うおっ！」
テラリアは直ぐに距離を取り、ライトセーバーを構え、襲撃者を見た
赤髪のショートヘアで、頭から小さな羽、背中からそこそこ大きな羽を生やし、白シャツに黒ベスト、ロングスカートの容姿だった
「食らえ！」
と弾幕を撃って来た
テラリアはライトセーバーでそれを簡単に弾き、今度は逆に距離を詰めた
相手も後ろに下がる
すると、テラリアは何かを感じた
フォースが伏せろと言っている
テラリアは思わず伏せた
すると
『恋符「マスタースパーク」！』
と魔理沙の声が聞こえ
頭上をレーザーが通過して行き、襲撃者を呑み込んだ
「危うく当たる所だったぞ！」
テラリアは魔理沙に抗議したが、魔理沙は「悪いな」と全く反省していなかった

「いつかお前に殺される様な気がしてたまらないよ」
とテラリアは皮肉を言った
「大丈夫だろ、その証拠にお前は避けた」
「いくらフォースでも出来る事と出来ない事があるんだぞ」
そんな話をしていた一方、シャープは本棚を調べていた
何か、役に立つ情報は無いかと
すると、シャープは一冊の本に目が止まった
それもその筈、何故ならオーラベシュで書かれた本だったからである
シャープは他にも無いか探した
結果的に15冊見つかった
「コマンダー、来テクダサイ」
「どうしたんだシャープ、何を見つけた?」
「コレヲ見テクダサイ」
「なになに、『怒りの書』…」
そこでテラリアは固まった
魔理沙もやって来て「テラリア、どうしたんだ?」と聞いた
「こ、これは…古代シスの文献ではないか!」

「そんなに珍しい本なのか？」
「もちろん」
　そうしていると
「図書室て騒いでいるのは誰！」
　と声が聞こえた
「お―っと不味いな」
「かなり嫌な予感がする」
「キリヌケラレル確率３８％」
　テラリアはブラスターのスコープを覗き、相手の場所を確認した
「テラリア、どうだ？」
「近付いて来ている、ヤバそうだ」
「キリヌケラレル確率１２％ニ減少」
「シャープ、黙っていてくれ」
「ラジャラジャ」
「おい、静かにしないと見つか…」
　魔理沙は二人を静かにさせようとしたが既に遅く
「そこに居るのね」

会話を聞かれたのか見つかってしまった

大図書室の戦闘パート2

「そこに居るのね」
その声が聞こえた途端、全員動きを止めた
「おい、テラリアどうするんだよ」
「コノ事態ヲ切リ抜ケラレル確率ハ１１３８分ノ１デス」
二人は半ば諦めていたがテラリアはまだ切り抜けられると思っていた
「まぁ待て、ここは穏便に済ませば良い」
と言うと、テラリアは声の主の前に出た
声の主は寝間着、俗に言うパジャマの様な服を着た紫髪の少女だった
「貴方は誰？」
「俺はテンス・ブラザーだ、お前は」
「パチュリー・ノーレッジよ、早速だけど貴方は何の目的で入ってきたの」
「それを聞いてどうする」
「答え方によっては貴方を排除するためよ、特にこの霧を晴らそうと言う奴はね」
「あっそ、俺はたまたまこの館の前を通りかかって興味があったから失礼しただけだ」

「…この館には門番が居る筈だけどどうしたのかしら?」
「あー…」
テラリアは忘れていた、この館の前には爆睡していたが門番が居た事を
穏便に住ますと言った以上、彼女との戦闘を避けたいテラリアにはあの手段しかなかった
「それを聞く必要は無い」とテラリアは言いながらさりげなく手を動かした
マインドトリックである
「…確かにそれを聞く必要は無い」
パチュリーは見事にマインドトリックにかかった
その様子を見ていた魔理沙とシャープは「これなら大丈夫だな」と思い始めていた
すると、突然扉が開き先程レーザーを食らった赤髪の少女がいた。
しかも増援を連れて来ていた
「覚悟しなさい!」
その声でパチュリーにかかったマインドトリックが解けてしまった
「はっ…私は何を」
「パチュリー様!その人から離れて下さい!」
「あら、小悪魔じゃない」

「パチュリー様、その人はこの霧を晴らす為にやって来たんです！そこの本棚の後ろにも居ます！」
いきなりバレてしまった
すると、パチュリーは本を開き何かを調べ始めた
「えっと、この三人を排除する方法は…」
交戦は避けられそうななかった
そうなればするべき事は一つしかなかった
「よし、魔理沙！パチュリーの相手をしろ、シャープと俺は小悪魔っていう奴と増援の相手をする！」
「わかったぜ！」
「ラジャラジャ」
地下の大図書室内にて戦闘が始まった
シャープはブラスターライフルを正確に撃ち、テラリアは迫ってくる弾幕をライトセーバーで反射し、ブラスターピストルを乱射していた
小悪魔は勇敢にもテラリアに積極的に弾幕を撃ってきていたが所詮、弾幕である

ブラスターの弾より圧倒的に遅い為に全て反射され、反射された弾幕によって小悪魔は倒された

大図書室の戦闘パート3

テラリアが小悪魔を倒した後も、魔理沙は戦っていた
「んー、中々厄介な弾幕だぜ」
と、魔理沙は呟いたものの、被弾する様子は全くなく
かえって余裕そうであった
一方のパチュリーは喘息の為か、苦しそうだった
どんどんパチュリーは押されていき、被弾した
「よーし勝ったぜ、ついでに本も数冊借りていくぜ」
と言うと魔理沙は本棚を漁り始めた
パチュリーは弾幕の被弾により、多少の怪我をしたようだった
パチュリーは治癒魔法のスペルを唱えようとしたが
喘息のせいで満足に唱えられずにいた
すると、
「大丈夫デスカ」
と機械的な声がした

振り向くとそこにはシャープが居た
「コマンダー、怪我人ノ様デス」
「バクタは有るか？」
「残ッテイマス」
「服の上から吹き掛けてやれ、こっちは小悪魔の治療中だ」
「了解」
と、シャープは何処かにいるテラリアと話し
パチュリーにスプレーを掛けた
パチュリーは普通の治療薬の様に長時間で治る物と思っていたがバクタを吹き掛けた傷口をふと見ると傷も残さず治っていた
「えっ、ちょっと、」とパチュリーは困惑したがシャープは
「タダノ、バクタ液デス、ソレクライノ怪我ナラ直グニ治リマス」
と言い
テラリアの方に移動した
後には困惑するパチュリーだけが残された
「シャープ、バクタの残量は？」

「バクタノ残量６４％デス」
「なら大丈夫だ…」
するとテラリアは大図書室の入り口の方を見た
「コマンダー、ドウカシマシタ？」
シャープはそう聞いた
「脅威を感じた、多分ここより下の階だ、お前はここで待て、３０分後に戻って来なかったら通信してくれ」
とテラリアはシャープを大図書室に残るように命じ
大図書室から出ていった

「お前の上司はどうしたんだ？」
魔理沙は本を抱えてそう言った
シャープはパチュリーからバクタについて質問を受けていた
『脅威ヲ感ジダ』ト言ッテ下層階に向カイマシタ」
するとテラリアの治療により回復した小悪魔が
「えっ！下層階に!?」
と大声を出した

パチュリーも
「何ですって！」
と大声を出し、咳をした
「エット、何ガソンナニ危険ナノデスカ？」
「私も知りたいぜ」
とシャープと魔理沙が聞いた
「この館には吸血鬼が住んでいる事はご存知ですか？」
「あぁ、知ってるぜ、レミリアだろ」
「吸血鬼ニツイテハ、アマリワカラナイデスガ一応知ッテイマス」
「レミィの事は有名だから知っているのは当然だけど、その妹が居る事に関しては知っているかしら」
「いや、わからないんだぜ」
「妹様の名前はフランドール・スカーレット、能力は
ありとあらゆる物を破壊する程度の能力よ」
その声を聞いた魔理沙は、とても驚き
「はぁ！そんな奴に幻想郷に来たばかりの奴が単身乗り込んだのかよ！」
と言った

しかし、シャープは動じなかった
「おいシャープ、あんたの上司が死ぬかも知れないのにどうしてそんなに普通に普通にして居られんだよ」
と魔理沙は言った
「コマンダーガ死ヌカモ知レナイ事態ハ、ザラニ有リマス
兵士トシテアル時ハ最前線デ戦ッタリ、マタアル時ハ暗殺ノ為ニ潜入シタリ、パイロットトシテ反乱分子の輸送船団を襲撃シタリシマシタ更ニ、コマンダーハ、獰猛ナラスター　ニ丸呑ミニサレテモ生還シマシタ、心配スルダケ損デス」
と言った
その声に三人は絶句した

地下の戦闘

テラリアはフォースに従い地下に向かって行った
途中、妖精などが攻撃してきたが、全てライトセーバーで弾き返した
真っ赤な廊下にいい加減うんざりしていると
奥に金髪で羽を生やした少女が見えた
「お前は…誰だ?」
テラリアはそう聞いた
「私はフランドールよ、あなたは?」
「キーコ　テラリアだ、こんな所で何してんだ?」
「休んでいるの、４９５年の間もね」
この時テラリアは彼女が人間では無い事を確信した
(そもそも羽が生えている時点で人間では無いのだが)
「俺は１５年の間、誘拐や暗殺、破壊工作、船団撃滅とかの仕事をこの腕とライトセーバーとフォースでこなしていたよ、たまにブラスターを使ったが」
フランドールは聞きなれない言葉に「何それ」と言った

しかし、フランドールは言葉を続けた
「まぁ良いわ。それよりあなたは人間？」
「あぁ、人間だが」
「へぇ～あなたが人間ね～」
するとフランドールはテラリアをじっくりと凝視した
テラリアはその行動の意味がわからなかった
「えーと、何でそんなに見つめているんだ？」
「人間って紅茶とか、ケーキになった物は見たけど動いているのは見たことが無いから」
「おいおい冗談だろ」
「本当よ」
その言葉を聞きテラリアはすぐさま距離をとりライトセーバーを起動させフリーハンドの人差し指と中指を伸ばして前に突き出し、ライトセーバーを持つ手を大きく後ろに引いた
防御フォームのソレスの構えである
「へー、あなたも剣を使うのね、もしかしてそれがライトセーバー？」
「だとしたら何だよ」
「私の暇潰しに付き合ってもらうだけよ！」

そう言ってフランドールは弾幕を張った
テラリアはそれを弾き返した
「へー、やるわね」
「ブラスターより、遅いからな」
「なら濃密な弾幕はどう？」
禁忌「クランベリートラップ」
すると、大玉が大量に出てきた
テラリアは「チッ」と舌打ちすると
驚異的な俊敏力で回避した
「なら次は剣で行くよ」
フランドールは次のスペルを発動した
禁忌「レーヴァテイン」
フランドールは炎を纏った大剣を振った
テラリアはそれをライトセーバーで受け止めた
二人は更に剣を振るった
刃が交差する度に火花が起きる
テラリアは距離を取った、しかしフランは距離を詰めて、つばぜり合いになった

「フランドール、中々やるじゃないか」
「…出来ればフランと呼んで欲しいわね」
「あぁそうかい！」
テラリアはフランにフォースをぶつけ、奥に飛ばした
そこでテラリアは攻撃に転じた
一気に距離を詰めて来たため、フランは防御をしたが
テラリアは力強い攻撃を連続で打ち付けてきた
ついにフランの防御が崩れ、剣を取り落とした
「あぁっ！」
その声でテラリアは我に返った
「しまった！」
テラリアは思わずフランの腕を切り落としていたのだ
しかしフランは
「ううん大丈夫、これくらい直ぐに再生出来るから」
と言い、腕を再生させた
「ふぅ、で暇潰しになった？」
「なったよ、今回は私の負けね」

　すると通信が入った
「あぁ、ちょっと失礼…シャープ？」
「コマンダー、大丈夫デスカ？」
「あぁ、フランって奴に勝ったよ」
「デショウネ」
「そうだよ、コトーの方は？」
「先程、異変ノ首謀者ヲ倒シタトノ報告ガアリマシタ」
「なら、大丈夫だな、そっちに向かう」
「了解デス」
　テラリアは通信を終えた
「フランも、来るか？」
「勿論行く！」
　こうしてテラリアはフランを連れて大図書室に向かった

時止めのメイド

魔理沙達と別れた霊夢とコトー
こちらも妖精の襲撃を受けていた
「全く、邪魔くさいわね！」
霊夢は弾幕を張りながら言った
コトーもZ―6ロータリーブラスターで妖精達を一掃しながら
「あぁ、一体どっから湧いてくるんだよ！」
と悪態をついた
それでも二人は前に進んだ
周囲の壁が穴だらけになろうが、弾幕で壁が破壊されようが、絨毯が焦げようが気にしなかった
館の中を半ば荒らしながら進むと銀髪でメイド服を着た少女がやって来た
メイドは二人の後ろに広がる荒れ果てた廊下を見て
「ちょっと！何してくれてるのよ！」

と叫んだ
「お嬢ちゃんすまないね、ちょいと穴だらけにしちまった。」
「それよりもあんたがメイドなら、主の所まで案内しな！」
「いいえ、廊下を荒らすような奴はお嬢様には会わせられません！」
どうやらメイドは通すつもりはないようだった
確かに廊下を荒らすような人達を通せば主が危険な目に遭うことはひを見るより明らかな事であった
「たとえ、時間を止めてでもお嬢様の為の時間稼ぎをするわ」
「時間を止めたら、意味無いだろ…」
するとメイドはナイフを投げ始めた。
コトーはロータリーブラスターを投げ捨て、床を転がり、なんとか回避した
霊夢も避けた
「メイドのくせによくやるな」
コトーはＤＣ―１７ハンドブラスターを構えながらそう言った
「誉めて頂き光栄ですが、私には咲夜という名前がありますわ」
とメイド改め、咲夜は更にナイフを投げ始めた
二人も避けながら、霊夢は弾幕を、コトーは低出力の光線弾を撃った

しかし咲夜の投げるナイフは、どうみても一度に十数本を投げていた
霊夢ならまだしも所詮、兵士のコトーには辛かった
ついにコトーは被弾し、倒れた
「コトーさん!?ちょっと大丈夫?」
「大丈夫だ、攻撃を続けろ!」
霊夢に攻撃を続けるよう言うと、コトーは体勢を建て直そうと立ち上がろうとした
するとコトーはあることに気がついた
床にはナイフが刺さったような後があるのにそのナイフが見当たらないのだ
さらに、視界の左端にあった床に転がったナイフも消えていた
そこでコトーはブラスターを殺傷モードに変えて、床に散らばったナイフに向けて撃っていった
「…っ!」
すると咲夜の顔に焦りが見え始めた
更に一度に投げるナイフの本数も減少した
咲夜はこれ以上の長期戦は避けたいと思ったらしく
スペルカードを発動させた

幻世「ザ・ワールド」
スペルカードが発動した瞬間、咲夜は赤い弾幕を発射した
するとコトーと霊夢のまわりに大量のナイフが出現した
「何!?」
流石に避けきれないと判断した霊夢はスペルカードを発動した
夢符「封魔陣」
それにより咲夜の弾幕の全てが消滅したと同時に咲夜は吹き飛ばされ、壁に叩きつけられ、気絶した
「霊夢、助かった…借りが出来たな」
「そんな事はどうでも良いの、ほら行くわよ」
霊夢は「結構重いわね」と言いながら、ロータリーブラスターを拾い上げコトーに渡した
二人は館の奥へ進んで行った

紅魔館の決戦

館の中を進み続け、屋上と思われる場所にでた
外は相変わらず赤黒く染まり、月もブラッドムーンだった
「そろそろ出てきても良いんじゃないかしら」
と霊夢が言った
すると、辺りから蝙蝠が出てきた
その蝙蝠は一ヶ所に集まり、一人の羽を生やした少女に
なった
「ふふふ、待っていたわ博麗の巫女、それとクローン兵さん」
その言葉にコトーは驚いたが平静を装い
「…なぜ俺がクローン兵だと分かった、俺の何を知っている、どこで何をしてきたのかも」
と聞いた
「私はレミリア、レミリア・スカーレットよ、吸血鬼で
運命を操る程度の能力があるわ、普通に貴方のこれまで辿ってきた運命も見えるわ

よ」
　どうやらレミリアは運命を操るらしい
「運命が何よ、私はあんたを倒すだけよ」
「運命なんてくそ食らえだ!」
　しかし二人は全く気にしなかった
　霊夢は先手必勝とばかりに、封魔針を投げつけた
　しかしそれは容易く避けられた
「その程度かしら?ならこちらも行くわよ」
　レッドマジック
　すると得体の知れない何かが飛んできた
　慌ててコトーはかわしたが後ろの赤い弾幕が避けきれず被弾し、ベチャと嫌な音がした
　どうやら血のようだった
　最初は自分の血かと思ったが、どうやら得体の知れない物から血が滴っているらしかった
「血液の弾幕かよ!」
「趣味が悪いわね」

「誉め言葉として受け取っておくわ。次行くわよ」
紅符「ブラッディマジックスクウェア」
こんどは血の滴るナイフであった
「全く、厄介な弾幕だ！」
コトーは悪態をつきながらも最小限の動きでロータリーブラスターを撃っていった
こんどは逆にレミリアの方がロータリーブラスターにくるしめられた
「ちょっと！これ、ルール違反じゃないの!?」
それもその筈秒間１６６回転もするロータリーブラスターを自分に向けて撃たれたら避けきれる可能性は限りなく低いのだから
仕方なくコトーはロータリーブラスターを端に転がし、ＤＣ―１７に持ちかけた
しかしそれでもコトーの正確な射撃と霊夢の絶え間ない
弾幕に押されていきレミリアは最後のスペルに賭けざるを得なくなった
紅色の幻想郷
今までより更に多くの血の滴る何かをばらまき濃密な弾幕を張った
コトーは成す術もなく、吹き飛ばされた
霊夢はまた、スペルカードを発動させた
しかしレミリアは大量の蝙蝠になりスペルカードを回避した

霊夢は軽く舌打ちしたもののこんどは正確に弾幕をレミリアに当てた、
するとコトーが弾幕の中に戻ってきた
「ちょっと、大丈夫なの?」
「ブラスターよりはましだからな、ほら、もう少しだ!」
二人は互いに連携しあいながらレミリアに弾幕を集中的に当てた
先程より正確、かつ濃密な弾幕によりレミリアは被弾数が増えた苦悶の表情を浮かべたレミリアはついに吹き飛ばされた
「やったわ!」
「よっしゃあ!霊夢、これで異変解決だよな?」
「いえ、まだよ。」
すると霊夢はボロボロのレミリアを引きずってきた
「霧を消させないとね。」
「おい、霊夢!怪我人だから乱暴するなよ」
「いいえ、大丈夫よ…」
と、レミリアが起き上がった、
「これくらいなら一晩で治るは、人間とはちがうからね」
しかしコトーはバクタのスプレーを取り出し、レミリアの患部に吹き掛けた、すると

気持ち悪いくらいの速度で再生した
　これには思わず
「うえっ」
「うわぉ」
　霊夢と、コトーも軽く引いた

　しばらくしてレミリアが霧を完全に取り除くと
　コトーに聞いた
「そういえば、貴方の上司に連絡しなくても良いのかしら？」
「おっと！完全に忘れていた！」
　慌ててコトーは通信を開始した
　テラリアの方には繋がらなかったがシャープの方には繋がった
「シャープ、繋がっているか？」
「ハイ、繋ガッテイマス」
「よし、異変の首謀者を倒したぞ」
「アナタガ、デスカ？」
「霊夢が倒した」

「ナルホド、デショウネ」
　すると
「それは何かしら」
　いきなりレミリアが聞いてきた
「これはコムリンクと言って、遠くの人と通信する機械だ」
「アー、コトー?」
「あぁ、すまない、どうすれば良いんだ?」
「とりあえず、パチェの大図書室に行きましょう。そこなら広いからね」
「ちなみにシャープ、お前は何処に居る」
「大図書室デス」
「…決定だな」
　こうしてレミリアとコトーと霊夢は大図書室へ向けて来た道を戻って行った

合流

霊夢、コトー、レミリアの三人は地下の大図書室に移動していた
「なるほど、銀河系には吸血鬼なる生き物は無かったな、蜂ならいたが」
「そういえばコトー、貴方って一体、何人を殺してきたのかしら、私は覚えてはいないけど」
「人間なら、2桁くらい、エイリアンなら3桁にはなるかな、ジオノーアンとか、アンバラ人とかには苦労したよ」
「その話を詳しく聞かせてちょうだい」
「私も気になるわね」
「それならまずは第一次ジオノーシスの戦いから話した方が良いな、そもそも俺達クローンの…」
と霊夢と、レミリアの二人はコトーの話を聞き、多少の質問をしながら歩いていった
しばらく行くと、まだ咲夜が倒れていた
「ねぇコトー、死んでいないよね」
「どれ、診てみよう」

コトーは咲夜の首筋に触れた
「気絶しているだけだ、霊夢、咲夜を背負ってくれ、俺はロータリーブラスターを背負っているから無理だ」
「全く、仕方ないわね」
と、霊夢は多少の文句を垂れながらも、咲夜を背負った
こうして4人は地下の大図書室へと向かった

一方、地下でもテラリアとフランが大図書室へと移動しながら二人はフランの姉のレミリアについて話し合っていた
「…でね、私が外に出ようとする度に外がどしゃ降りになるのよ、お姉様は何で私を館から一歩も出さないのか、わからないのよ」
「お姉さんがお前を外に出したがらないのは、多分お前を危険な目に遭わせたく無いんじゃないかとおもうんだよ」
「危険な目って?」
「奴隷売買業者、見知らぬ生命体、賞金稼ぎ、他にも色々」
「…少なくとも幻想郷には居ないと思うのだけど」
「既に吸血鬼という見知らぬ生命体に会ったのだが…」

「それって私に喧嘩売ってる？」
「いやいや、喧嘩を売るならもっと徹底的やるさ」
と二人は多少話題が安定しなかった

そして地下の大図書室では
シャープが魔理沙とパチュリーと小悪魔に銀河系の話をしていた
「…ト言ウ訳デ、我々ハ幻想郷ニ着イタノデス」
「超空間ね…興味をそそるわね」
「なぁなぁシャープ、お前の居た所には高火力の武器とか無いのか？」
「エー、共和国ノ戦艦ニ付イテイタビーム砲トカ、サブジュゲーター級ヘヴィクルーザー、ノ、イオンパルス砲デスカネ」
そんな話をしていると、コトーと霊夢がレミリアとその従者である咲夜を連れて来た
コトーと霊夢の二人はこちらには来ていなかった為
「はぇ～、ここが大図書室か、ジェダイアーカイブを思い出すな…」
「なんかここ、ジメジメしているわね」

と思い思いの感想を言った
すると、
「まぁ、とにかく「やる」のが大事だ、「やってみる」のような曖昧な気持ちでは駄目だぞ」
「うーん…わかった、やるわ」
テラリアとフランがやって来た

吸血鬼の姉妹

「その声は…フランドール？」
　レミリアは声がした方を向いた
　そこには、コトーと同じ、泥に近い色の装甲服を着けた男（これがテラリアである事は既に分かっていた）と自分の大切な妹、フランドールが立っていた
「お姉さま…」
「地下室に居ないと駄目でしょ！ほら、早く」
　レミリアはフランを地下室へ戻そうとしたが、
「まぁまぁ」
　とテラリアが割り込み
「フランの話を聞いてあげる」
　と軽く手を動かしながら言った
　レミリアはテラリアの話を聞くつもりは無かったが何故か
「フランの話を聞いてあげる…」
　と言ってしまった

レミリアは、はっとしたが既に遅く話を聞くしか無かった
「ありがとうお姉さま、でもお姉さまと私、二人だけで話したいの、だから外に出ていて」
とフランは言った
仕方ないので全員は図書室に繋がる廊下で待つ羽目になった
（数時間後）
霧が晴れた空が白み始める頃、フランとレミリアが図書室から出てきた
どうやらフランは自分の気持ちをレミリアに伝えられたようであった
「コマンダー、あのお嬢ちゃんに何をしたんですか？」
「秘密だ…それはさておき、これで異変解決だろ、霊夢」
「ええ、そうよ…早く帰るわよ」
「もちろんだぜ」
こうして、霊夢達は後に紅霧異変と呼ばれる異変を解決した
「よーしコトー、里まで行ってフリートに霊夢達が異変を解決した事を伝えに行ってくれ、コムリンクがバッテリー切れだ」
「了解」
「シャープは今回のレポートを書くぞ」
「了解デス」

異変に関するレポート
目的　幻想郷全域に広がる霧を止める
解決者　博麗　霊夢
　霧雨　魔理沙
　キーコ　テラリア
　ＷＴ―１９５０
　シャープ
結果　解決
戦闘　霧の湖　大妖精（名称不明）チルノ［種族　妖精］
　一匹は気絶、もう一匹は魔理沙が倒す
紅魔館／門前　紅　美鈴［種族　妖怪］
　気絶
紅魔館／大図書室　パチュリー・ノーレッジ［種族　魔法使い］
　魔理沙が倒す

小悪魔（名称不明）
小悪魔が放出した弾幕を偏向してぶつけて倒す
十六夜　咲夜［種族　人間］
弾幕になるナイフを破壊していき、霊夢が倒す
紅魔館／廊下
レミリア・スカーレット［種族　吸血鬼］
飽和（一応、回避は可能な範囲で）攻撃を仕掛けた
紅魔館／屋上
フランドール・スカーレット［種族　吸血鬼］
テラリアの力強い攻撃に防御を崩された
紅魔館／地下

消費　ブラスターパック　13個
バクタスプレー　6個
コムリンクのバッテリー　1個
その他　特になし
記入者　キーコ・テラリア
シャープ

「…よし、こんな物かな?」
「十分デスネ。」
二人はレポートを作成し終えた
するとちょうどコトーが戻って来た
「伝えて来ましたコマンダー」
「ご苦労だった」
「それと、もう一件報告が…」
「何だ?」
「霊夢からの宴会の誘いです」
その言葉に二人は困惑した、何故このタイミングで宴会なのかと
「えーと、何故このタイミングで宴会なんだ?」
「どうやら、この幻想郷では異変を解決すると、異変の当事者も含めて酒を飲んだりして、親睦を深めるそうで」
「ツマリ、酒飲ンデ水ニ流ソウト言ウ訳デスカ」
「あぁ…で、コマンダーどうします?フリートは行くらしいですが…」
「うーむ」

テラリアは考えた、こんな状態で宴会とは暢気にも程がある、しかし宴会が親睦を深める手段なら行かない訳は無かった、しかし不安要素はまだまだ抜けない、

そして、テラリアは

「…よし、博麗神社に向かおう。全員準備しろ」

「了解！」

宴会に参加する決断を下した

博麗神社の宴会

三人はスピーダーバイクに乗り、博麗神社の鳥居の下まで来た
スピーダーバイクを停めて鳥居を潜ると、霊夢達が宴会の準備をしていた
「あっ、テラリア来たのね」
「おぉ、尋問官が来るとは思わなかったな」
と、霊夢とフリートがテラリア達に気づき声をかけた
「幻想郷で親睦を深めるためには酒盛りらしいからな」
「マァ、私ハ　ドロイドナノデ飲メナイデスガ」
すると霊夢は
「助かるわ、準備するのに人手不足なのよ、だけどとりあえずお賽銭をお賽銭箱に入れて」
「お賽銭？」
するとフリートが
「つまりは金くれって事だよ、テラリア」
と説明してくれた

仕方無いのでテラリア達は賽銭箱に向かって歩いた
賽銭箱の下には参拝の仕方が書かれた札があったのでそれ
に従い、お賽銭として帝国クレジットを入れ、二礼二拍手一礼をすませ戻って来た
「ありがとね、じゃあまず台所に行って…」
とテラリア達は宴会の準備を手伝った
日が傾くにつれて、宴会の参加者が集まってきた

魔理沙やスカーレット姉妹とそのメイド、妖精のチルノやルーミア、さらには文や紫まで来た
「そこそこ集まってきたな」
フリートと共に料理をつまみ食いされないように見張るテラリアはそう呟いた
シャープは霊夢からの指示があるまで端で待機しておりコトーはＤＣ―１７ハンドブラスターを奪った魔理沙を取り押さえていた
「そのうち慣れるさ」
と、フリートは言った
すると後ろに何かを感じ、反射的に二人は振り向いた
そこにはスキマから紫の手が料理をつまみ食いしようと伸びていた

テラリアは低出力にセットしたＸ―８ナイトスナイパーを正確に射撃し、紫の手を弾いた
どこからか「アッ！」と声がしたが気にしない
「あぁ、宴会をするのにこんなに疲れるのかよ！」
魔理沙からＤＣ―１７ハンドブラスターを取り返したコトーがやって来た
「お気の毒に」
「慰めありがと」
「はいっ全員注目！」
突然、霊夢が言った
「これより、異変解決のお祝いとして、宴会を開催します、全員楽しんで下さい、全員、乾杯！」
「「「「乾杯！」」」」
どうやら宴会の開催の言葉の様だった
こうして、宴会はスタートした
テラリア達は初めての宴会に少々、戸惑ったものの、直ぐに馴染み、料理や酒などを堪能した
すると、紫が「楽しんでいるかしら」と言いながらやって来た。

「まあね、結構楽しめているよ」
　するとコトーが紫の白い手袋が黒ずんでいるのに気がついた
「紫、手袋が黒ずんでいるが…」
「コトーさん、それ以上は言わない方が身のためよ」
　紫は多少の殺気を放ちながらコトーに言った
「あぁ…了解」
　コトーもそこで引き下がった
「ところで紫、言いたいのはそれだけでは無いよな、もっと別にある筈だろ」
「もちろんよ、とりあえず明後日の早朝に魔法の森を通り抜けて再思の道を進んだ先にある無縁塚に来てちょうだい、出来れば［リザレクション］で来て欲しいわ」
「何で、［リザレクション］じゃないと駄目なんだ?」
「何でもよ、これ以上は質問はしないで」
「了解」
「解れば良いわ、それでは、飲み直しましょう」
「えーと…あまり大量には飲めないのだが」
「ふーん、私の酒が飲めないのね、なら流し込んであげます」
「おいおい、それってアルハラ…」

紫は強制的にテラリア達に酒を飲ませ続けた

結局、コトーが酔い潰された辺りで、フリートが紫を気絶させた、テラリアとフリートの二人はフォースでアルコールの分解を促進したため、酔いつぶれなかった

この宴会が終わる頃には、参加者の大半が酔いつぶれていた

「フリート、俺達で片付けるか…」

「その案に賛成だ」

結局、宴会の片付けはテラリア、フリート、シャープの三人でする羽目になった

無縁　の遺物

早朝、テラリア達は無縁　に居た
宴会で、紫が「無縁　に来て」と命令したのだから
拒否する事も可能だったのだが、テラリア達は幻想郷に
居させてもらっている立場なのだ
幻想郷の管理者の命令に従うのは当然、とテラリア達は
考えていた
すると、紫がスキマから出てきた
「あら、てっきり来ないのかと思ったわ」
「来ないのなら、その場で拒否する」
「ふーん、わりと従順なのね」
「それが軍隊だからな、もっとも命令が間違っているのなら、話は別だがな」
「まぁ、良いわ、それで貴方達を呼んだのは、」
と、紫は一旦言葉を切り、後ろを向き、何かを唱えた
するとそこには、何機かの古い宇宙船が並んでいた

しかもそれらは全て見覚えのある機種だった
「これらについて知りたいのよ」
「これは…」
「共和国のスターファイター…」
「ＣＩＳノモ…」
「こんな物まで、幻想郷に来ていたのか…」
「その、反応は知っている様ね、教えて欲しいわ」
「…これ以外にも沢山あるのか？」
「スターファイターはそれだけよ、他にもあるけど、見たいなら見せるわよ」
すると手招きし、スキマに入っていった
テラリア達はそれについていった
「これよ」
紫は指を指したすると、そこには先程のスターファイター
が計１５０機程並んでいた
更には、様々な歩行兵器（ウォーカー）が並んでいた
「…シャープ、これは現実だよな？」
「ハイ、現実デスガ」

「これを一から全て説明するのか…大変だな」
　すると、シャープは
「ソレナラ、私ガ説明シマス、データニ沢山情報ガアルノデ、役立ツデショウ」
　と名乗りを上げた
「それなら、教えて欲しいわね」
「ワカリマシタ、ソレデハ一番手前のスターファイターカラ、ソレハＢＴＬ―Ｂ　Ｙウィ…」

　と、シャープは紫に向けて延々と各兵器の説明を続けた
　紫は時々、シャープに質問をする程度で、それ以外は
　ひたすら黙って聞いていた
　シャープが話している間、テラリア達は船の状態や、
　損傷箇所がないか調べていた
　そして、シャープの説明が終わる頃には昼になっており、テラリア、コトー、フリートの三人は糧食パックを開けてブランチにしていた

「ト、銀河系デモ類ヲ見ナイ、高度ナ技術ガ使ワレテイルノダ、コレデ私カラ話セル事ハ

無クナッタガ特ニ質問ハ無イカ？」
「特に無いわ」
「シャープ、説明は終わったな？」
「ハイ、尋問官」
「良し、次は俺達からだ、飯食いながらで構わないが聞いてくれ、ここにある兵器の状態をチェックした」
「あら、それはありがとう」
「で、ＣＩＳの兵器だが、全てがいつでも運用が可能な状態だ、人員が居ればの話だがな、共和国の兵器はＹウィングとイータ級シャトルを除けばアストロメクドロイドがいれば運用可能、イータ級シャトルは、ハイパードライブの修理が必要、Ｙウィングはエンジンの修理だな」
「どのくらいで、修理できる？」
「少なくとも一週間、幸いな事に前面がぺしゃんこになった機体があるから、その部品を転用すれば良い」
「良かったわ」
「最後に帝国の兵器、ＴＩＥファイターは殆どが使い物にならない。だが、横のソーラーパネルは、まだ生きているから河童辺りに売り付ければ高値になる、ＡＴ―ＡＴは縦に

起こせば運用可能、ＡＴホーラーは泥を取り除き、胞子を除去すれば運用可能になる、ＡＴ―ＳＴは特に無い」
「なら、良いわね」
「じゃあ、俺達はこの辺で失礼するよ」
「んー、テラリアだけは残って」
「はい!?」
「ちょっと貴方にはもう一つ用があるの、良いかしら?」
　テラリアは紫の意図がわからなかったが
「うーむ、了解」
　と、残る事に決めた
「コマンダー、罠の可能性もありますが…」
「だったら、罠に飛び込むさ」
　こうして、テラリアを残し、フリート、シャープ、コトーの三人は［リザレクション］に乗り、引き揚げていった
「で?紫、何の様なんだ?」
「貴方は、スペルカードルールについて知っているかしら?」
「あぁ、霊夢から聞いている。」

「そう、なら話は早いわ、貴方には」
紫はそこで一呼吸置き、
「自分のスペルカードを作って貰うわよ」
と言った

弾幕

「はい？」
「貴方は自分のスペルカードを持っていないでしょう、だから作ってほしいのよ」
「…ブラスターとかでは駄目か？」
「駄目よ、貴方の能力は強力すぎるから、スペルカードで、加減してほしいのよ」
「だが、弾幕が出せないから無理だと思うが」
「何とかするわ、それにフリートさんもやっているわよ」
「ジェダイもか!?」
「もっとも、弾幕を弾幕にぶつけて相殺するだけだけどね」
「…うーむ、拒否権は？」
「有るとでも？」
　テラリアはため息をつき、「わかった」と言った
「それで、貴方の能力であるフォースは、大体どんな事が、出来るのかしら？」
「えーと予知、認識能力の拡大、触れる事なく対象を動かす、記憶への干渉、身体強化、心を読む、心理操作、光学迷彩、思考の遮断、モリ・クロー、マラシーア、フォースグ

リップ、フォースライトニング、隔離だね」
「…割と汎用性高いわね、あとモリなんちゃらとかについても教えて欲しいわね」
「モリ・クローは相手の新陳代謝を制御し、心臓の動きを止
める技
マラシーアは相手に強烈な眩暈と吐気を催させる
技、
フォースグリップはフォースで首を絞める技、
そのまま絞め殺す事も可能で、
フォースライトニングは指先から電撃を放つ技、
隔離は特殊なフォースの技の戦闘瞑想や、亡霊の憑依を解除したりする技、今から４
０００年近く前のシス三頭政治の時代のシスのダース・トレイヤが使用した技
こんな感じの説明で良いか？」
「…なかなか刺激的な技ね、そのマラシーアとモリ・クロー、フォースグリップは弾幕決
闘では使用してはだめよ、ルールが崩壊するわ」
「了解、それで弾幕の出し方はどうやるんだ？」
「これを着けなさい」
紫はテラリアに黒の手袋を渡した

「これは？」
「弾幕が出るように、妖力が豊富な私の髪を縫い込んだ手袋よ、フリートさんは私の式の尻尾の毛だけどね」
「式？」
「そのうち紹介するわ、それよりも練習をするわよ」
「了解」
　こうして、テラリアは紫から、弾幕決闘の為にスペルカード作りと、戦い方を学んだ
　小弾や、大弾、レーザー、弾幕の起動の変更
　レーザーを途中で湾曲させる弾幕のやり方
　それ以外にも様々な事を学んだ
　そして、
「はい、それで良いわよ」
　日が暮れる前にようやく一枚目を完成させることが出来た
「ふむ、なかなか大変だな」
「貴方、攻撃的過ぎるのよ、じゃあ早速やってみて」
「了解、混沌『アカディーズ・メイルストロム』」
　テラリアはスペルカードを宣言した

そして、両手を広げ水色の大弾と、小弾を一気に展開、
大弾は奥の方に、小弾は手前に広がり、そして時計回りに回転し始めた
テラリアは適当なタイミングで、フォースライトニングを小弾に向けて放った
やがて、発動時間が終了した
「どうかしら、初めてのスペルカードを使ってみて」
「作る時は大変なのに、使うとあっという間」
「まぁ、後は自分で頑張りなさい、それでは家に送るわ」
すると、紫はテラリアの足元の空間を裂いた
テラリアは成す術もなく落下した
幸いな事に、下の地面が何故か、ぬかるんでいたため無事だった

屑鉄

「ハイドロスパナは何処だ！」
「これです！」
「あんがとよ」
　テラリア達は大量の宇宙船の修復作業をしていた
　幸いな事ににとり達が手伝いに来てくれたものの
「盟友、部品が余ったけどどうすれば良い？」
「シャフトを逆に取り付けたのは誰だ！」
「Ｙウィングのリアクターを割るつもりか！」
「これを何処に取り付ければ…」
「盟友、部品が足りないよ」
　挙げ句の果てには、部品を盗もうとする奴まで現れたりとピットドロイドを雇った方がましと思えるような感じであった
　そのため、修復は思うように進まなかった
　他に手伝いに来てくれた、フリートと共に三人が機体にもたれ掛かり休んでいると

一瞬で空が暗くなった、
それと同時に上の方から地鳴りのような音もしていた
四人は急いで船に戻り、レーダーを起動した。すると、そこには特徴的な艦橋を持つ全長１１５５ｍの戦艦、ヴェネター級スターデストロイヤーが映っていた
この事に四人は驚くと共に、違和感を覚えた
「バカな、ヴェネター級は全て退役したのに、何故こんなところに…」
「それに、あんなでっかい物何処に置いておけば忘れることができるんだよ…」
「そもそも、紫と話した時に、コルベット以上の大きさの船は入って来れないように結界を強化したと、言っていた筈だ…」
「武装モ共和国当時ノママデス」
「とりあえず確かめるしかないな…そうだな、全員ハンガーへ移動！」
「コマンダー、まさか…」
「そのまさかだ」
その言葉を聞きコトーはため息をついた
「なぁコトー、まさかって何だ？」
フリートは聞いた
「見てみればわかります」

と、コトーは言いさっさと移動して行った
やがて四人は、ハンガーへ移動し、隅にあるシートに覆われた物の前に集まった
テラリアはシートを取り外した、するとそこには全長１３ｍの箱形の宇宙船が現れた
共和国のＬＡＡＴ／ｉを彷彿とさせる横に開く大きなハッチや
ＶＣＸ―１００の部品を流用したと思わせる背面レーザー砲
極めて頑丈そうにみえるが、その船体には、レーザーが当たって焦げた箇所もあれば、火が吹き出た様な跡もある箇所があった
コトーはフリートの方を向き「これが、まさかだ」
と言った
「尋問官、この屑鉄は何だ?」
「ビトレイアル級アサルトトランスポートの［スペクタクル］だ」
「その船に航行許可が降りていることに驚いたのだが…」
「こいつは見た目以上に頑丈だからな」
と、テラリア的外れな回答をしていると
霊夢と魔理沙がやって来た
「テラリアさん、あの空の物体をどかしてくれない?お洗濯物が乾かないから困るから」
「私もだぜ」

と、苦情を言ってきた
「あの物体に関しては俺の責任じゃないし、あんたらの洗濯事情を言われても知らん、だが今からあれに乗り込む」
「どうやって乗り込むつもり？」
霊夢は聞いた
「それは、後ろにある［スペクタクル］で乗り込む」
霊夢と、魔理沙はテラリアの後ろの［スペクタクル］を見た途端、疑いの目を向けた
「何あの薄汚い物置小屋は、飛ぶの？」
「まるでごみ捨て場で拾った部品を寄せ集めて作った様な感じだな」
と散々な評価だった
「なあに、ちゃんと飛ぶさ」
テラリアはリアクターを始動させようとした
しかし、中々始動しない
テラリアは次第に苛立ち、計器板を思いっきり蹴った
すると、リアクターが始動した
「嘘でしょ!?」
と、霊夢は言った

「雑過ぎるでしょ」
と、魔理沙は何かに寄っ掛かりながら言った
すると、コトーが
「魔理沙、そいつに寄り掛かるのは、止めた方が良い、［スペクタクル］爆弾投下モジュールだ、多分、中にまだ入っている」
すると、魔理沙は慌てて距離を取った
「そ、そんな物騒な物放置しておくなよ！」
「どの口が言う、八卦枦の方が明らかに危険物だろ」
「おーい、出発するぞ、乗るなら早くしろ」
テラリアは出発準備を整えていた
結局、テラリア達４人の他に霊夢と、魔理沙も乗る事になった（霊夢は魔理沙に無理やり乗せられたが）
内装は、計１２個の、セーフティーバーのついた座席と、背面レーザー砲の銃座に続く梯子、ハッチの前に取り付けられた、大型のブラスターが見えた
「意外と中はしっかりしているのね」
テラリアは最後のチェックをしていた
「コトー、銃座に行ったか？」

「はい、勿論です」
「ジェダイは、副操縦席へ」
「何でだ？」
「向こうの船に通信を試みる、繋がったらお前が出るんだ、俺が出ると怪しまれる」
「了解」
「霊夢、魔理沙ベルトを締めておきな、回避行動をとる可能性があるからな、シャープは足を磁力で固定しておきな」
「「わかった（ワカリマシタ）」」
「良し、行くぞ」
　テラリアは最後のチェックを終わらせた、リパルサーリフトを起動し、船が浮き、そのままエンジンが起動し、ハンガーから、一気に空へ飛び出した

失われた船

幻想郷上空、雲の中／［スペクタクル］内

「結構揺れるわね」

シートに座った霊夢はそう呟いた

確かに、空に出てから右や左に大きく揺れたりしていた

すると頭上の砲手席についていたコトーが

「仕方ないだろ、スタビライザーを止めているんだから」

と言ってきた

霊夢の隣に座った魔理沙は「すたびらいざー？」

と聞いてきた

すると、船を操縦していたテラリアが答えた

「船を安定させる装置の事だ、本来なら作動するべきだがなこの船だと、何故か滅茶苦茶に加速してしまうからな、もはやただの加速装置と化しているのが、現実だな」

「それって意味無いよな」

副操縦席に座ったフリートが言ってきた

「まぁ、そうだな、実際この船は帝国軍の中でも一番厄介な機体と呼ばれていたからな…おい見えたぞ、やっぱりヴェネター級だ」
　雲を抜けると、そこにはヴェネター級スターデストロイヤーがあった、何故、ここに来たかも気になるが、何よりも気になるのは
「何で共和国カラーなんだ?」
　という事である
　事実、銀河共和国が銀河帝国になったあと全てのヴェネター級スターデストロイヤーは共和国の外交特権を意味する赤のカラーリングからグレー一色のカラーリングに変更されていたのだ
「で、どうするのよ」
　霊夢は聞いた
「あの船と、通信するに決まっているだろ…フリート、通信をつなぐからお前が返事しろ、良いな?」
「はいはい、了解」
　テラリアは通信を繋いだ、するとクローントルーパーの声が聞こえた
　しかし、声に抑揚が殆ど無かった
『こちら、共和国の戦艦［ローグ］です、どんなご用件で…』

『こちらはフィリアス・イカルド将軍だ、貴艦に着陸を要請する』
『え…あ、はい、ちょいと、こちらでは…あのー…揮発性の燃料が漏れて…』
『修理ドロイドはどうした？』
『ぶ、分離主義者達に破壊されまして…』
『なら、尚更着陸しなければ、こちらには修理ドロイドがいる、受け入れに備えろ』
『ラジャーラジャー』
　通信は終わった
「シャープ、罠である確率は何れくらいだ？」
「ホボ１００％罠デス」
「私も博麗の巫女としての勘が罠だと告げているわ」
「それを踏まえた上でテラリアはどうするんだぜ？」
「罠に飛び込むに決まっているだろ」
　ヴェネター級の背面ハンガーの扉が開き、「スペクタクル」はその中に入っていった
　内部は不思議と静まっており、誰もいないのも相まって気味悪く感じた、
　テラリアは空いているスペースを見つけ、そこに船を停めると
「とりあえず中を捜索だな、シャープとコトーは船を守れ」
「了解」

「俺と、フリート…いやフィリアスでハンガーを捜索する」
「フリートで呼んでくれ、頼む」
「わかったよ、さて、これで良いな？行くぞ」
と、テラリアとフリートは［スペクタクル］から出た
すると、「ちょっと待って！」と霊夢が言ってきた
「私達はどうするのよ」
「船に残れ」
「嫌よ、私は博麗の巫女よ、自分の身くらいは守れるわよ」
と霊夢は憤慨した
「わかった、わかったよ、とりあえずこれを持って行きな」
テラリアは霊夢にコムリンクを渡した
「使い方は魔理沙に聞きな、フリート行くぞ、付いてこい」
「はぁ…そっちが付いてくるべきでは？」
「うーん、そうだな」
と、言いながら二人は船の奥に消えた
霊夢と、魔理沙はテラリアとフリートが行った方向とは逆の方向に進んでいった

その頃［スペクタクル］の中に残ったコトーは、考えていた
［ローグ］について思いだそうとしていたのだ
「アー…コトー、何ヲソンナニ考エテイルノデスカ？」
「いや、この船［ローグ］について考えていただけだ」
「［ローグ］ニ関スル情報デスカ…私ノデータバンクニ、少シ情報ガアリマシタ」
「ほう、教えてくれ」
「ヴェネター級スターデストロイヤー［ローグ］、”サーリッシュの戦い”ニ参加、分離主義者ガ拿捕ニ成功…」
「…ん？ちょっと待て！分離主義者に拿捕されたのか!?」
「ソウデスガ、何カ？」
「何故それを言わない！」
「聞イテコナカッタノデ、言イマセンデシタガ…」
「もう、過ぎた事は仕方ない。」
コトーはテラリアに危険を伝える為に連絡をとろうとした
コマンダー、応答してください！…クソッ、応答を！」

「どうした、コトー」
「コマンダー!この船は分離主義者に拿捕された船です!」
「何だと!直ぐに霊夢と魔理沙に警告をしなくては…」
突然通信が途切れた
「コマンダー?コマンダー!…クソッ妨害電波か」
ふと、窓の外を見るとバトルドロイドがこちらに二分隊こちらにやって来るのが見えた
一分隊は途中で別の方へ行ったものの、もう一分隊は船に向かって来た
「嫌ナ予感ガシマス」

仕掛けられた罠

テラリア達と反対の方向にいった霊夢と魔理沙は倉庫と思われる場所を発見し、そこを探索していた
「うーん…怪しい物しか無いな」
「ここまで多いと、よくわからないわね」
大量の円筒型の何かが大量に置かれていたと思えば、変な金属の箱がいくつも置いてあり、中に金属製の球体が大量に入っていた
更に壁にはいくつもの銃が掛けてあった
どうやら武器庫のようだ
しかし、武器庫なら警備がいてもおかしくは無いのに、誰もいないのだ
それがかえって不気味であった
「魔理沙、油断は禁物よ、さっきから物凄く違和感をかんじるの」
霊夢は辺りを見渡し、警戒していた
しかし、殆ど何も起こらなかった
「何も起こらなかったな」

「じゃあ、『こっちには何も無かった』と、でも言っておく？」
「おう、頼むぜ」
霊夢はテラリアに通信を試みたが何も反応が無かった
「何も反応しないわよ」
「は？ちゃんと私は確認したぜ、コトーからコムリンクの通信の仕方は教えてもらって、ちゃんと教えてもらった手順で確認したから、間違いなく繋がる筈だｚ…まさか！」
「まさかって、何よ」
「通信が妨害されているとしたら！」
「…て事は、私達は最初から、罠に嵌まっていたって事よね、だとしたら違和感の正体は…」
すると、二人を囲むように白い膜のような物が出現した
「…これね」
「何なんだ、これ…」
魔理沙は膜に触れようとした
「魔理沙触れちゃ駄目よ、嫌な予感がするわ」
魔理沙は慌てて手を引っ込めた
すると、骸骨の化け物の様な姿をした何かが銃を構え、大量に現れた

『動クナ！』
「えっ？」
『動クナト言ッテイル！』
「霊夢、動かない方が良いみたいだぜ…」
『オ前達ハ何ノ為ニ、ココニ来タ！』
「英語ね…私は専門外だから、魔理沙に任せたわ」
「は!?…まったく、仕方ない」
　魔理沙は骸骨の化け物の姿の何かに話しかけた
『私は霧雨魔理沙、それでこっちが…』
『名前ハドウデモイイ、何ノタメニココニ来タノカ話セ』
『人の話を聞けよ！』
『早ク話セ』
『…幻想郷の上に現れたこの船を退かす為だ』
『何処ノ上ダッテ？』
『幻想郷だ』
『ゲンソウ…キョ…ア駄目ダ、プログラム二無イ、オマエラを逮捕スル、ショック起動！』
『おい、待ｔ』

魔理沙の抗議もむなしく、霊夢と魔理沙は電気ショックで気絶させられ、捕らわれてしまった

一方、テラリアとフリートは…

「フリート、共和国軍は自分の船にころがったバトル・ドロイドの残骸を放置するのか？」

「私の記憶が正しければ、それは無い」

「だとしたら、ますます怪しいな、他のも探そう」

二人はこの船に誰が居るのか、おおよその検討がついていたものの、確実な証拠を探していた

すると、

「コマンダー、応答してください！…クソッ、応答を！」

コトーが連絡をしてきた、どうやら緊急の用らしい

「どうした、コトー」

「コマンダー！この船は分離主義者に拿捕された船です！」

その言葉にテラリアとフリートは驚いた

「何だと！直ぐに霊夢と魔理沙に警告をしなくては…」

すると、突然、通信が切れた
「妨害電波か…すぐに船に戻るぞ！」
二人は［スペクタクル］に戻ろうとして、後ろを振り返ると、
「武器ヲ捨テロ、早ク捨テナイカ！」
十数体のＢ１バトルドロイドがブラスターを構えていた
テラリアとフリートはライトセーバーを構え、起動した
バトルドロイドは二人に向けて発砲、しかし彼らは慣れた動きでレーザーを弾き、次々に倒していった
すると金属製の大きな物体が転がって来た
デストロイヤードロイドこと、ドロイデカである
「デストロイヤーだ！」
ドロイデカは足と、ブラスター、そして偏向シールドを展開し、発砲した
二人はライトセーバーでブラスター弾を反射したが
偏向シールドに阻まれ、ドロイデカ本体にはダメージは入らない為、二人は少しずつ押されていった
「ここで死ねば、お前を道連れにできるな…」
「そうだな」

二人は死を覚悟した。
すると、
「攻撃ヲ中止シロ」
と機械音声が聞こえ、ドロイデカとB1バトルドロイドが攻撃を止めた
そして、ドロイド達は脇に並んだ
そこにはシャープが立っていた

忠誠

「「シャープ!?」」
　テラリアとフリートは突然のシャープの登場に驚いた
「どうやって助けに来た?」
「ソレハ…」

　～話は遡ること数分前～

「それで、作戦ってのは何だ?」
「ヒトマズ隠レロ、アトハ私ニ任セロ」
「了解」
　コトーはジェネレーターの影に身を隠し、シャープはスライドドアの前に立った
「大丈夫なのか?」
「大丈夫ダ、私ハ、スーパータクティカルドロイドダ、バトルドロイドノ上官ニアタルカラナ」

「あぁ、成る程」
一方、［スペクタクル］の外では、バトルドロイドが集まっていた
『イイカ、ドアヲ開ケルゾ』
バトルドロイドはスライドドアの開閉パネルを撃ち、ドアを開けた
『武器ヲ捨テロ！』
バトルドロイドはブラスターを構えた、そこにはシャープが立っていた
『エーッ！嘘！』
『将軍ダー！オ前ラ整列！』
バトルドロイドはあっという間に列を作り、整列した
『アー…将軍？ゴ命令ヲ…』
『イイゾ、コトー出テコイ』
「やれやれ」
コトーが出てくると、バトルドロイドがブラスターを構えた。
しかし、
『見ロ、クローンダ！』
『バカ言エ、クローンハアンナアーマージャナイゾ』
『ダケド、声ガクローンダッタ』

『オ前コンピューターガ、イカレタノカ?』

と大論争になり始めた

しかし、シャープが議論に割って入り、質問をした

何でバトルドロイドが動き続けていているのかを

しかし、バトルドロイドは、サーリッシュの戦いでスターデストロイヤーを拿捕し、バトルドロイドを補充して、しばらくした後、ハイパースペースワームホールに引き込まれて

ここに来た事しか知らなかった

逆にバトルドロイド達が聞いてきた

その言い方ではまるで分離主義連合が負けたような言い方ではないかと

シャープとコトーは全てを説明した

分離主義連合は共和国に負けた事、ジェダイの裏切りと共和国は帝国になった事、バトルドロイドは全てが機能停止になった事

そしてクローン戦争で使われたほとんどの軍艦は惑星ブラッカで解体されている事を

この事実にバトルドロイド達は動揺を隠せなかった

「ソンナ…ダトシタラ俺達ハドウスレバ…」
「スクラップニサレルカモ…」
シャープは動揺しているバトルドロイドに
「トリアエズ、攻撃ヲ中止ヲサセロ、オ前達ノ別動隊ガ攻撃シテイルノハ我々の上官ダ」
「デスガ、通信ヲ妨害シテイルノデ…」
「ナラ私ガ直接行ク」
～こうして今に至る～
「なるほど、将軍ユニットだからこう言う事ができた訳か」
「危機一髪だった」
すると、フリートが突然
「あれ、霊夢と魔理沙は?」
と言った
シャープはバトルドロイドに霊夢と魔理沙の所在を聞いた
「アノ二人ナラ気絶サセテ、牢屋ニ入レテイル」
「これは時間がかかりそうだ」
全員は霊夢と魔理沙が起きるまで待つ事にした

交渉

霊夢と魔理沙が目を覚ますと、そこには大量のドロイド兵が自分たちを見下ろしていたのが見えた
二人は弾幕を放とうとしたが、突如テラリアが出てきて、それを手で静止した
魔理沙はそれに抗議しようとしたが、テラリアに「まぁ、まず私の話を聞け」と言われ、八卦炉を取り上げられてしまった
テラリアはこの船とドロイド兵についてを分かりやすく説明した
霊夢と魔理沙は何とか理解はしてくれたが、船をどうするかの問題が残っていた
「どうするわけ?このデカ物を」
「とりあえず、紫を呼んで欲しい」
「え?良いけど、何の為に?」
「呼んでくれ」
「ハイハイ」
霊夢は何かを唱えた、すると目の前の空間が裂け、紫が出てきた。バトルドロイドは少々ざわめいたが、シャープが「黙レ」と言って黙らせた

「霊夢、結界を緩めるのは駄目だって何回言えばわかるの？」
「来ないからよ、それよりもテラリアさん、相談したい事があるんじゃないの？」
「あぁ、そうだな…紫、少し相談したい事があって」
テラリアは紫にこれまでの経緯を説明した
更にテラリアは紫に小声で
「お前、一度月に敗北したらしいな、月の武力がどの位かは俺は知らないが、この船とドロイド達は相当役にたつぞ」
と言った
紫は少し反応したが
「幻想郷の秩序を乱す可能性はあるのかしら？軍隊でしょ」
と聞いてきた
「バトルドロイドは命令を忠実にこなす、ただし裏を返せば、命令が無い限り動かないよ」
「誰が命令するの？」
「将軍ユニットのシャープ、その上官の俺、プログラムの更新さえすればお前でも命令ができる」
「少し考えさせて」

紫は少々考えこんだ、
そして、何かを決心しドロイド達に向かって言った
「分かりました。この船と、その乗員である貴方達を幻想郷は歓迎します。しかし、軍事組織が幻想入りするのは前代未聞です、だから私の命令にも従ってもらいます。」
「「ラジャラジャ」」
どうやら、無事に迎え入れられたようだった
すると、一体のＯＯＭ・コマンドバトルドロイドが質問した
「将軍ト貴女ノ命令、ドッチヲ優先サセルベキデスカ?」
紫が答えるよりも早くがシャープは答えた
「我々ハ幻想郷ニ居サセテモラッテイル立場ダ、紫ノ命令ヲ優先サセロ」
「ラジャラジャ」
結局、この船は里から離れた場所の平原に着陸し、そこに、駐屯基地を設立する形で落ち着いた。
また、森で離着陸していた［リザレクション］も駐屯基地に移動し、霊夢と魔理沙とフリートはテラリアの操縦する［スペクタクル］により、家までおくられた
なお、テラリアが「呼ぶのにいちいち霊夢に頼むのは面倒」という理由で紫にコムリンクを渡した

来訪者

翌朝、［ローグ］からの通信が来た
［ローグ］カラ［リザレクション］ヘ、不明ノ飛行生命体ガシキリニ軍事機密情報ノ開示ヲ要求シテクル、対応ヲ待ツ」
テラリアが［リザレクション］の艦橋の窓から［ローグ］の左舷ハンガー入り口を見ると、数体のバトルドロイドに囲まれた、射命丸が見えた
［リザレクション］から［ローグ］へ、私が直接対応するからその場で待機しろ、以上」
テラリアは射命丸の元に近付いた、どうやら難航しているらしい
「…だから、その情報を教えて欲しいんですよ」
「プログラムニ反スル行為ハ出来ナイ」
「私は新聞記者ですよ」
「関係ナイ」
「この船を吹き飛ばしても良いんですよ?」
「人里ニ残骸ノ雨ガ降リ注グ可能性４８％」
「むむむ…」

「トニカク、オ前ノ乗船許可ト軍事機密データハ開示デキナイ」
　テラリアはそこに割って入った
「はいそこまで、ドロイド軍は持ち場に戻れ」
「ラジャラジャ」
　テラリアはバトルドロイドを持ち場に戻らせた
「で、何が知りたいんだ?」
「まずはですね、そのロボット達と変な建物について知りたいですね」
　テラリアはドロイド軍団と、［ローグ］が幻想郷に現れた理由を説明した
　文はさらに軍事機密の情報を要求した
「文、お前が機密情報を知りたい気持ちも分かる」
「分かるなら教えてくださいよ、教えてくれるまで追いかけますよ?」
「うーん…」
（ここで断っても良いが、後々面倒な事になりそうだな、かといって、教えるのも…）
「どうしますか?」
「…仕方ない。文、少し待ってくれ」
　テラリアは［リザレクション］に向かって走って行った
　数分後、テラリアはデータチップを持って来た

「このチップに情報が入っている。これを渡すから良いだろ?」
「…これ単体では見れませんよね?」
(チッ)
テラリアは舌打ちした。一方の文はしたり顔だった
仕方なくテラリアは文にデータチップとパッドを渡した
文はチップとパッドを受けとると「ありがとうございまーす」と言い、山へ飛んで行った
「で、作戦は成功ですかね?」
コトーが歩いてきながらそう言った
「大成功だ」
テラリアはそう返した

一方、文は自分の家でテラリアから受けとったパッドを点けたまま、固まっていた
それもそのはずである、船や兵器の名称は英語で書かれていたものの、それ以外は全く見たことの無い言語で書かれていたのだから
文は何とか解読しようと躍起になったが殆どが不明のままであった。

その後、文はテラリアに翻訳を頼んだが、流暢なジオノージアン語とハット語を理解できず、諦めてしまった

夜の来訪者

文が諦めて帰った後、テラリアは何とか兵器の修理を終わらせていた
その間、人里の方から何人かやってきたが、バトルドロイドが（外交的な）交渉して対応した、妖精に関しては、問答無用でバトルドロイドが発砲した（チルノはスーパーバトルドロイドの火炎放射を見るまでは粘ったが）
［リザレクション］に居たテラリアはコムリンクで紫に「兵器の修理が完了した、引き続き保管するが、ＡＴ―ＡＴだけは引き取って欲しい、対応を待つ」と言った
「さて暫し、瞑想にふけますかな」
テラリアは床に座った

駐屯基地・正門
夜中の幻想郷は極めて危険である
夜は妖怪が活発に動き出す時間の為、駐屯基地が襲撃される危険性があるのだ
そんな夜中の警備もバトル・ドロイドが担当だった（交代での）
『点…（ザー）…ーレク異常無…（ザー）…繰りかえ…（ザー）…点オーレク』

「ダメダ、通信機ガ不調ダ、見張リヲ交代シテクレ」
「ラジャラジャ」
　バトルドロイド達が誰も侵入させないように見張っていると、突如視界が真っ暗になった
「何モ見エナイ、視覚センサーノ故障カ？Ｂ１―４４２何カ見エルカ？」
「何モ見エナイ、Ｂ１―９９１オ前モカ！」
「何ガオキテルンダ！」
　しかし、すぐに視界が回復した
「ン？見エルヨウニナッタナ…」
「何ダッタンダ…今ノハ？」
「サアナ、俺ハアッチヲ見テクル」
「ラジャラジャ、俺ハ通信機ヲ直セルカ頼ンデクル」
「ラジャラジャ」
　Ｂ１―９１１はハンガーベイへ向かって行った
　そして、その後ろにいた人物にも気付く事は出来なかった

［リザレクション］　士官室

（何かが…近づいてくる、かなり強いフォースだ、それも暗黒面のフォースだ）
テラリアは瞑想をしていた
（だが、負の感情は感じられない…どういう事だ？）
（…とりあえず、探りに行くか）

テラリアは瞑想をやめ、お香を消し、部屋から出ていった

駐屯基地
［ローグ］／左舷ハンガーベイ入り口
「アー…誰カ正門ノ警備ヲ代ワッテクレ、通信回路ガ故障シテ…」
侵入者はハンガーのドアの端から入ろうとしていた
しかし警戒しすぎたせいか、素早く入ればいいものを壁に張り付くように、そろりそろりと入ろうとした為、
「オイ！ソコデ何ヲシテイル！」
見つかったしかし、素早く船の下に隠れ、どさくさ紛れで逃げようとした
一方、バトルドロイドは真っ暗な船の下を覗き込んでいた

「暗クテ何モ見エナイ」
「ドウスル？」
「爆弾ヲ投ゲ込モウ」
「何言ッテンダ　ボケ！船ヲ壊スツモリカ！」
「炎八ドウダ？」
　バトルドロイドが議論しているとテラリアがやって来た
「尋問官、侵入者ガ船ノ下ニ逃ゲマシタ、爆弾ヲ投ゲ込ンダ方ガ良イデスヨネ？」
「バカイエ！炎ダロ！」
「侵入者に関しては知ってる、だがな、お前らはライトで照らすという発想は無かったのか？」
「アー…ラジャラジャ」
　テラリアは額を抑え、「先が思いやられるな」と呟いた
　バトルドロイドはライトを持ってきて船の下を照らした。
　すると、一ヶ所だけ大きな黒い何かが見えた
　テラリアはフォースで引き寄せた。すると、「きゃあ！」という可愛らしい悲鳴と共に少女が現れた
「尋問官、コイツハ誰ダ？」

「ルーミアだ、何の為に来たんだ？」